

成城大学経済研究所
研究報告 No. 38

「前近代」世界システム：形成と変容

明 石 茂 生

2004年3月

The Institute for Economic Studies
Seijo University

6-1-20, Seijo, Setagaya
Tokyo 157-8511, Japan



「前近代」世界システム：形成と変容

明 石 茂 生

1. はじめに

イマヌエル・ウォーラーステインが提示した「世界システム」の理論は、さまざまな分野で応用され、きわめて大きな影響を社会科学に与えている。ところが、「世界システム」理論を提示することになった、ウォーラーステインの名著『近代世界システム』（1974, 1980, 1989）が、15世紀末にヨーロッパで形成された資本主義経済もしくは「近代」社会の特性を描き出そうとしたものにすぎなかったことは、忘れてはなるまい。現代のグローバル資本主義経済に繋がっていく、「ヨーロッパ世界経済」こそが、彼の関心事であり、世界システム理論という独特の方法論を育む原風景であったのである。

これを翻ってみると、ウォーラーステインの世界システム理論は「近代」とは何かを問う作業であったと解釈できるのであるが、近代の画定については、もちろん他にも様々な基準が提示されているのであり、一義的にウォーラーステインの基準を受け入れるべきというものではない。たとえば、経済学的視点からみれば、「近代経済成長」という経済成長パターンの変化をもって時期を設定しようとする立場があり、労働や土地を含めたほとんどの分野に市場のメカニズムが入りこみ、制度として市場による資源配分機能が支配的になった状態をもって時期を画する立場もある。また、国際収支の視点から、資本輸出のパターンが定着する状態をひとつの基準とすることもあろう。「近代」の基準は、このようにさまざまでありうるが、ウォーラーステインの世界システム理論に限ってみると、中核／半辺境／辺境という分業体系を中心に、「世界経済」というシステム概念を提示し、「近代」の特性を16世紀という早い時期に打ち出したという点で、何よりも注目せざるをえないものを持っているのである。

ところが、「近代」を世界システムという立場から捉えた場合、「近代」を「近代」以前から区別しようとする視点を裏返しにして、逆に「前近代」から「近代」をみようとする立場が論理的に可能となる。ウォーラーステインは、世界システムを「世界経済」と「世界帝国」という概念を使って描写しようとし、このことから前者が「近代」、後者が「近代以前」を代表すると解釈されるのであるが、この近代以前の時期に世界システムの概念がどのように適用されうるかが、社会科学に多大な影響を与える原因のひとつになったと考えられるのである。次節で簡略に紹介されるように、世界システムの概念は前近代社会にまで応用されるに至り、それゆえに固有の問題と概念の修正が促されてきた。それは、図らずも、「前近代」とは何かを問うことになり、ウォーラーステインの意図を超えた領域に世界システムのパースペクティブが展開することになったのである。

本稿は、このような世界システム理論の展開を追っていき、「前近代」世界システムとは何か、それは現代において単なる過去の産物と見なしうるのかを、改めて問うことをしてみたい。第2節では、前近代社会への適用という点から世界システム理論の反響を簡略に紹介し、第3節では、前近代経済において「世界システム」の内実がどのような要素によって構成されているかを考え、第4節では、実質的に「前近代」世界システムを形作ったユーラシア世界経済の形成と変容を、とくに古代の時期に注目して、描写していく。最後に、暫定的な結論が提示されるはずである。

2. 世界システム理論：提示と反響

冒頭でも述べたように、ウォーラーステインの名著はあくまでも資本主義世界経済の生成と発展に向けられたものであり、15世紀末に現れた「ヨーロッパ世界経済」の展開を叙述したものにほかならなかった。彼の新機軸は、歴史的に存在した社会体系が、「ミニシステム」という特殊なケースを除けば、中核と辺境という地理的な分化を含んだ広大な領域を覆う分業体系、すなわち「世界システム」として表現できるという方法論にあった。現代にまでその内容を進化させている資本主義世界経済は、世界システムとしての「世界経済」と解釈され、15世紀末の「ヨーロッパ世界経済」の誕生をもって始まるとされる。

この意味で、ウォーラステインの関心は当初から西欧に起源をもつ資本主義社会にあったのであり、それ以前にあったのではなかった。

しかしながら、「世界システム」の概念が与えた影響は、資本主義社会ないし西洋近代社会を対象とした分野に限られていない。世界システムの理論的概念は前資本主義社会ないし先史社会まで応用されるほどに、歴史学、人類学、考古学など広範囲にわたっている。シュナイダーによれば、ウォーラステインが与えた世界システム・パースペクティブは、西洋と非西洋をともに分析できる唯一の理論的枠組みを提供しているゆえに、壮大な可能性を社会科学に与えている。それは、西洋と非西洋の人々または伝統的と近代的な人々が変化に対し同様の法則に従うのだ、ということの理解に貢献していたのである (Schneider 1977: 20)。

ウォーラステインが与えた世界システムの概念には「世界システム・パースペクティブ」と「世界システム理論」という2つの異なる概念が内包されている (Peregrine 1996: 1)。前者は、「世界」を自律的な政治・文化的単位の集合体とし、それら単位が経済的な相互関係を通じてより大きな機能的単位と繋がるとみていく研究計画法である。それに対し、後者は経済的相互作用を明確にし、さまざまな世界システムのタイプを定義する。世界システム・パースペクティブは、全体における構造とパターンの形成と進化を前提にしている。とりわけ、2つの重複する過程、地理的分化と分業に象徴される同一単位間の相互作用と、多様で不均等な権力を有する地域の間で行われる競争という2つの過程は不可欠である。

他方の世界システム理論は、さまざまなタイプの経済的過程を定義するものであり、ウォーラステインは歴史上存在した社会システムを3つの段階に分けて類型化していた。彼の関心は「世界システム」すなわち政治、文化的単位を包含する分業システムにあったのであるが、その始原的形態として閉鎖的な局地経済である「ミニシステム」を提示していた。このシステムは物理的規模において小さく、経済的境界が政治的、文化的境界と大体一致しており、その歴史的寿命は短い。その後で現れるのが「世界システム」であり、これには「世界帝国」と「世界経済」の2つの形態がある。ここで使われる「世界」とは、ミニシステムより大規模な空間と長期的な時間を意味しており、複数の文化的集団が存在し分業体制の中に組み込まれている。これら集団が政治的に統

合されている場合を「世界帝国」と呼び、統合されていない場合を「世界経済」と呼んだのである(Wallerstein 1979: 156-7)。近代以前の「世界システム」は「世界経済」の形態をとることがあっても、じきに政治的に統合されてしまい、「世界帝国」に移行した。このシステムは膨張と収縮という周期的なパターンをとり、その寿命は多様である。ときには大帝国を形成することがあったが、全世界を覆うことはなかった。それに対し、15世紀末から成立する「ヨーロッパ世界経済」は「世界帝国」になることなく、その領域を拡大して世界を覆うまでに至っている。

これら3つの形態に対応するように、ウォーラステインはマルクスの「生産様式」の概念をポランニー(Polanyi 1977)の互酬、再分配、交換という3つの社会統合の形態に依拠しながら修正し、異なった様式をそれぞれに振り分けている。「ミニシステム」特有の様式は「互酬的=リニッジ的 reciprocal-lineage」と呼ばれ、専門化は初歩的でかぎられており、生産物は互酬的に生産者間で交換される様式である。「世界帝国」の様式は「再配分=貢納的 redistributive-tributary」と呼ばれ、農民と手工業者分を除いた余剰は強制的に貢納として中核部へ移転され、官僚に再配分される様式とされる。最後の「世界経済」における生産様式が「資本主義的 capitalist」と呼ばれるものである。「世界経済」では内部の集団(国家)が政治的に統合されていないため、中核部での強制的な収奪は不可能であり、経済的余剰はもっぱら市場を通じて交換により実現される。そして「世界経済」は膨大な行政官僚機構に多大な費用をかけずに済むため、その分余剰は資本蓄積に配分されうるのである。「ヨーロッパ世界経済」が途中で衰退することなく、現在に至るまでその領域を全世界に拡大し続けられたのは、その基本となる生産様式の違いによるものである(Wallerstein 1979: 155-56)。

ところで、「世界システム」が単一の分業体制を形成するという特徴は、地理的な分化を生み出すということであり、製造物を生産し移出する中核地域と逆に中核地域に必要な農産物や原材料などの一次産品を移出する辺境地域が形成されることを意味する。「世界帝国」にあつては、領域内が政治的統合されているという性格から、中核地域(都市)の周辺には辺境地域が位置することになり、おもに貢納という形で物資ないし余剰の移転が行われている。それに対し、「世界経済」では中核地域には競合する強力な諸国家が存在し、熟練労

働と技術を使用した高付加価値の製造物を辺境地域に輸出し、弱体な政治組織で構成された辺境地域からは安価な農産物や原材料などの生活必需品 bulk goods が中核諸国家へ輸出される。その結果、中核諸国家では余剰が形成・蓄積され、分業体制の維持・強化へ再投資されることになる。¹⁾

さらに、「世界経済」では中核諸国家と辺境地域間の貿易の仲介役を果たすことになる半辺境地域が存在する。この地域は中核と辺境の間に起こりがちな紛争を制限する政治的な緩衝地域として役割を果たし、また中核から移入された旧式な技術を使って製品を生産し輸出するという、中間的な性格をみせている。「世界経済」は高価な製造物と安価な生活必需品の生産と交換という単一の分業体制を構成し、中央に強力な競合する政治体を有する中核諸国家、周辺に政治的に脆弱な辺境地域という構造を形成する。このシステムの外部に奢侈品などの交易によって接触する外部世界が存在するが、それはあくまでも「世界システム」の外部として位置づけられる。他方、半辺境地域は中核諸国家と辺境地域の間にも地理的にも構造的にもあり、以前は中核地域であったり辺境地域であったりする。つまり、「世界経済」は政治的に統合されていないがゆえに、中核地域や辺境地域の位置づけは相対的で、変動するものであり、その変化（ないし進化）の集積点が半辺境地域となる。「世界経済」の中核となる重心点は変化しうるものであり、外部世界をシステムに取り込むことによって辺境地域は拡大し、その一部は半辺境地域となって分業体制を変化させていくことができるのである (Wallerstein 1974: 349-352)。

このような構図で描かれる「近代世界システム modern world-system」がウォーラステインの関心をひきつけていた対象であったのであり、近代以前というべき 16 世紀以前の「世界システム」には「世界帝国」という概念を提示しただけで、彼にとって関心の低いものであったといえる。しかしながら、本

1) このような分業体制の強化には、リカードの比較生産費説から派生して、より一般性を求めたヘクシャー＝オリーン＝サムエルソンの不完全特化理論を適用することにより説明が可能である。しかし、自由貿易体制下でその理論は要素価格均等化をもたらし、資源量に応じた所得分配の修正をもたらす。ウォーラステインのような従属論者の主張は、同じ自由貿易体制を前提にしながらも、むしろ収穫逓増ないし外部性を前提にした完全特化型の分業理論を想定した方が当てはまりがよい。ただし、2つの分業理論はともに貿易当事国の便益が向上するという点で共通している。もちろん、この他にも製品の差別化を考慮にいたした不完全競争市場モデルも想定しうる。収穫逓増・外部性など不完全競争と貿易を前提にした経済理論については、Helpman (1984), Krugman (1995) のサーベイを参照されたい。

節の冒頭でもふれたように、「世界システム」概念は、近代以前（前資本主義社会）にも応用できるという理論的枠組みを社会科学に与えており、ウォーラーステインの意図を超えた領域に「世界システム」の方法と理論は拡大していったのである。²⁾

前資本主義社会への適用については、シュナイダーの批判によってその端緒がつけられたとあってよい (Schneider 1977)。シュナイダーの批判は、ウォーラーステインが「世界システム」の分業体制を構成する商品として生活必需品のみをあげ、奢侈品を外部世界との交流のみに関係させてその取引を分業体制の構成部品からはずしてしまっていることに向けられている。奢侈品取引を扱う遠隔地交易はシステムの外部との接触に関係するにすぎないとして、その意義を過小評価しているが、前資本主義世界システムでは奢侈品が遠隔地交易を通じて体系的に移動しており、その消費者ないし供給の管理者がエリート層であったとはいえ、奢侈品が威信や権力に密接に関係するという意味で地域社会におおきな影響力を持っていたことを過小評価すべきではないというのである。欧州とアジアにおいて「前資本主義世界システムを想定することが可能であり、中核地域は貴金属を蓄積し、製造物を輸出する一方で、辺境地域は最終財の流入に対して貴金属を放出させている」のである (Schneider 1977: 25)。

実際、ウォーラーステインの叙述の中に16世紀の「世界経済」が成立する以前の12世紀における北西ヨーロッパの位置づけが言及されている。当時のユーラシア大陸にはいくつかの帝国や小世界が密集し境界を接していたのであるが、それらは大きく6つの地域に区分され、北西ヨーロッパは経済的にはまったくの周辺地域 (marginal area) にすぎず、封建制と呼ばれる社会形態にあった (Wallerstein 1974: 17)。中世末期のヨーロッパでは単一の世界帝国や「世界経済」は成立していなかったとさえ述べている (Wallerstein 1974: 36)。しかし、奢侈品と貴金属の流れから分業体制を眺めたとき、この時期においても帝国や小世界を超えたシステムが観察でき、地理的な分化が想定できる。前資本主義世界のヨーロッパはレヴァントやアジアの中核地域の周辺（外部）地域ではなく、貴金属の流出と奴隷貿易の代わりにアジアの奢侈品を輸入するという辺境地域

2) 例えば、前近代社会への「世界システム」理論の適用については、Algaze (1993)、Blanton and Feinman (1984)、La Lone (2000)、Palat and Wallerstein (1999)、Peregrine (1992)、Sherratt (1993)、Shipley (1993)、Voll (1994)、Woolf (1988)などをあげることができる。

であったのであり、ヨーロッパ内部で毛織物産業を興隆させることにより辺境から中核への道筋をつけることができたのである (Schneider 1977: 25)。

奢侈品を含んだ遠隔地交易の観点から分業体制を描き、余剰の収奪も含んだ地理的な分化（中核／辺境）と分化された地域間の競争を織り込むとき、帝国だけでなく周辺の地域・国家をふくんだ「世界経済」が前資本主義世界にも想定できるわけであり、「世界帝国」を主要な世界システムの形態とするウォーラステインの考えに修正を促すものとなる。それは異なるレベルでの修正・再構築を引き起こすことになるのであるが、そのひとつはウォーラステインとフランク (A. G. Frank) との分離に象徴されるように、決定的な分岐点に相当するものであった。³⁾

このずれは、ウォーラステインに多大な影響をあたえたブローデル (Fernand Braudel) との関係においてもみることができる。⁴⁾ 『近代世界システム』の出版後、ブローデルも『物質文明、経済、資本主義』 (Braudel 1979) を刊行し、両者の間にはいくつかの見解の違いはあっても基本的な観点は一致していると述べている。ちなみにブローデルはウォーラステインの「世界システム」に対応する概念として「世界経済 *économie-monde*」を使っており、「世界帝国／世界経済」の区別をしていない。ブローデルの「世界経済」は、境界をもった地理的空間を占め、中心に支配的都市を有し、中心都市周辺の中心地域、中間地域、そして辺境地域のヒエラルキー構造を形成する世界である。「世界経済」では都市の役割が強調されているのであるが、中心となる都市は時代を通じて変遷していくのである。

ウォーラステインとの違いは、ブローデルが近代以前にも「世界経済」の存在を認め、複数の共存を主張していたことである。「ウォーラステインが16世紀以降に形成されたヨーロッパの世界経済以外に、世界経済は存在しないと見なしているのに対して、私は、ヨーロッパ人にその全体的な姿で知られる以前に、中世、いや、古代からすでに、世界は、多少なりとも集中化され、多少なりともまとまりをもった経済地帯、すなわち、共存する複数の世界経済

3) フランクがウォーラステインとどのようにして分離していったのかは、彼自身の告白 (Frank 2000) を参照するのが一番適当である。

4) ブローデルとウォーラステインの違いは、思っている以上に大きいとして、フランクは彼自身の立場である世界システムの連続性の主張と同調させるように、両者の違いを彼らの著作から問い直している (Frank 1995)。

に分割されていた、と考えている。」(Braudel 1976: 訳 122, 一部修正) ブローデルはヴェネチア、アントワープ、アムステルダムと中心都市の変遷を想定しており、「ヨーロッパ世界経済」はその意味でも 16 世紀の成立というより、遅くとも 1380 年代のヴェネチアの中心化にさかのぼると述べている。ヨーロッパ以外にもロシア、トルコ、インド、中国にも「世界経済」が存在していたとされ、それら「世界経済」の間には広大な辺境地帯があって、相互の交換はごく限られたものでしかなかったとも述べている。しかし、「ロシア世界経済」を語るとき、そこは決して閉ざされた世界ではなく、東西南北の隣接する地域と経済関係をもち、とりわけトルコとの関係は密接であった。その経済関係は、西洋はロシアに対し原料を求め奢侈品・貨幣を供給し、東洋はロシアから工業製品を購入し、染料、奢侈品、安価な織物を供給するという分業的なものであったのである (Braudel 1979: t. 3, 380-82)。

視野を狭めれば、前近代においてウォーラステインの意味で「世界システム＝世界帝国」の構図が適用される例を多く見ることができる。しかし、それでもその内容はそれぞれ特色があり、十分な注意が必要である。政治的に統合されたシステムという「世界帝国」の定義は、現実の社会システムにあてはめた場合、必ずしもうまく適合しないことが多いからである。視野をさらに拡大し、シュナイダーの遠隔地交易の重要性を考慮すると、「世界システム」(ブローデルの言う「世界経済」)を相互に関係づける、より大きなシステムの存在が浮び上がってくる。これを湯浅越男は「諸世界間システム」と呼んでおり、世界史のなかに総括する視座に到達するものと位置づけている(湯浅 1985: 140-41)。ウォーラステイン自身、「ヨーロッパ世界経済」の成立前に、相互に接触する 6 つの地域があることを述べていたが、それぞれをブローデルの「世界経済」とすれば、それらを相互に関連させ、包含させる高次の「世界システム」(「諸世界間システム」)が存在していたとみることができる。1250 年から 1350 年における「世界システム」を扱った、アブールゴドの著作『ヨーロッパ覇権以前』(Abu-Lughod 1989) は、ユーラシア大陸に展開した「諸世界間システム」を描いたものにほかならない。

このようなユーラシア大陸に存在していた「諸世界間システム」は、その論理を推し進めれば、内容と中心が変化していくとはいえ、経済的相互関係は時間を通して不変であるという特質を示すことになる。それは、なにも 13 世紀

のみ存在していたとはかぎらず、その起源を溯っていけば、古代にまで辿り着くであろう。フランクとギルスによれば、それは文明が最初に発生した5000年前まで溯ることになるのである (Frank and Gills 1992, 1993, 2000)。諸世界間システムとしての「ユーラシア世界システム」は、諸文明の隆盛と衰退とともに領域と中心を変えていったとはいえ、一貫して存在していたわけであり、それは現在のグローバル資本主義経済にまでつながるものとなる。フランクの著作『リオリエント』(Frank 1998)はその発想を体系化したものにほかならない。とすれば、現代の資本主義世界経済を、500年前に成立した「ヨーロッパ世界経済=近代世界システム」の発展型にもとめるか、5000年前に起源が溯る「ユーラシア世界システム」における重心の移動にもとめるかで、その性格と位置づけが大きく異なってくる。ウォーラステインとフランクの分岐の源泉は、このように「世界システム」の定義付けのみならず、その概念を基礎付ける世界観の違いにまで溯るのである。

さて、シュナイダーの批判は、「世界システム」理論にもう一つの反応を引き起こしていた。その理論を先史時代または考古学の分野にまで適応しようという動きであり、その結果引き起こされた世界システム理論の再構築である。ウォーラステインの本来の関心が西洋中心の資本主義世界経済にあったため、考古学者によって研究されていた単純で非西洋的な経済システムの分析には不都合であったことは否定できない。接点があるとすれば、「互酬=リニッジ的」生産様式で構築された「ミニシステム」という世界であろう。これは経済的境界が政治的文化的境界とほぼ一致している閉鎖的な経済を指しているのであるが、そんな社会が実際存在していたか、人類学者達は疑っている (Wolf 1982: 76, Peregrine 1996: 3)。そのままの理論的枠組みでは考古学が扱う分野にはあまり役に立たない。しかし、方法論としての「世界システム・パースペクティブ」は依然魅力的であり、「世界システム理論」の再構築をほどこしながら、その適用を試みた研究は数多くみられる。再構築の方向は、おおきく2つに分かれる。ひとつは地理的分化の再定義であり、他は経済的相互関係の再定義である。前者は、ウォーラステインの中核/半辺境/辺境の区別とそれらの搾取関係に対応した部分であるが、先史社会では搾取ないし従属関係は必ずしもみられるとは限らない。

例えば、青銅器時代のスカンジナビアでは二層構造の中核・辺境関係がみら

れる。高次のシステムは局地間の地域をカバーし、従属関係はあるが搾取関係は欠如している。他方、局地に規模が限定される低次のシステムでは、その中の共同体の間で搾取関係がみられるのである。低次のシステムにおいて中核共同体のエリートがその社会的地位を再生産するには、エリート・シンボル(威信財)を交易する独立政体間の高次世界システムとの連結が必要であった(Kristiansen 1987)。また、別の先史世界システムでは、辺境地域は中核地域に依存していないと考えられている。コールによれば、中東青銅器社会では「辺境地域が中核地域の間にある時は、交換の条件を指定するのに望みがないわけではない。中核地域との関係が利益に適うと受けとめられるかどうかによって、辺境地域は中核との関係を発展もさせ終了もさせる。」(Kohl 1987a: 20) さらに技術が単純で移転可能である状況では、辺境地域は技術的に洗練され、革新的にさえなるとも述べている(Kohl 1987a: 21-23)。

もうひとつの経済的相互関係では、ウォーラステインはすべての人々に評価される生活必需品 *bulk goods* の取引により世界システムが成立するとしたが、奢侈品にもっと注目すべきであるというのがシュナイダーの批判であった。先史社会では、奢侈品というより権力の維持(再生産)に必要な威信財の交換と消費が重要である。政治的連合または社会的再生産が、外国との交易から得られる外国産の特定の貴重品を消費したり交換することに結びついている場合、威信財を介した地域間のシステムが存在するになり、これを世界システムとみなすこともできる。先にふれた青銅器時代のスカンジナビアや、初期鉄器時代の南西ドイツ、前コロンブス時代のメソアメリカ社会、10世紀から12世紀におけるミシシッピ社会などに威信財交換に基づいた世界システムの例をみることができる。⁵⁾

このような先史時代もしくは人類学分野にまたがる世界を包含する形で、世界システム概念を一般化するには、ウォーラステインの枠組みは拘束的であり、その緩和ないし修正が必要になってくる。チェイス=ダンとホール(C. Chase-Dunn & T. Hall)が試みた世界システム概念の再定義は、このような事情を勘案した上でのものであった。すなわち、すべての世界システムは分化された中核/辺境をもつが、前資本主義世界ではヒエラルキー的または搾取関係を

5) Kristiansen (1987), Frankenstein and Rowland (1978), Blanton and Feinman (1984), Peregrine (1992)などを、より一般的な議論については Ekholm and Friedman (1985)を参照されたい。

持つとはかぎらない。先史社会では、多くは大体生存水準で自己充足する一方、エリート層の社会的再生産は他の社会との相互作用に依存する、という事情を考慮に入れたのである (Chase-Dunn and Hall 1992: 101-105)。彼らが提示した広義の「世界システム」は、別名「中核／辺境構造」と称され、(交易、戦争、婚姻、情報などの) 相互作用が構成要員の内部構造の再生産に重要であり、これらの局地的構造のうちで生じる変化に重要な影響をあたえるような社会間ネットワークを意味している (Chase-Dunn & Hall 1993: 855, 1996: 12-13, 1997: 28)。

そこで特徴的なことは、社会間の不平等または搾取関係がなくても中核／辺境構造 (世界システム) を想定でき、このためにこの中核／辺境関係を考える際、中核／辺境分化 core/periphery differentiation と中核／辺境ヒエラルキー core/periphery hierarchy の2つの概念を区別していることである。前者はひとつの世界システム内で異なる複雑度と人口密度をもつ社会が相互に作用する状態を表し、後者は政治、経済、イデオロギイ的支配が異なった社会の間で存在する状態を表している。したがって、分化はあってもヒエラルキーがない状態を想定できるわけである。さらに世界システムは、その内容を限定する各種のネットから成る多層構造で表現され、生活必需財ネットはその境界を限定するように政治／軍事ネットで包含され、政治／軍事ネットは相互に連携するように威信財ネットによって包含される。その威信財ネットと重複する形で情報ネットが構築される。また、ある世界システムは他の世界システムと接触し、融合することが可能である。その結果、多極的な中核／辺境関係が形成されるのである (Chase-Dunn & Hall 1997: 59-63)。

このようなシステムのタイプを区別するため、ウォーラーステインの生産様式を参考にしながらも直接の使用を避け、生産、分配、交換、蓄積の構造的論理を表現する概念として蓄積様式 mode of accumulation が使われている。蓄積様式には、Wolf (1982) や Amin (1991) に依拠して、「血縁基礎様式」「貢納様式」「資本主義様式」の3つが採用されている。「血縁基礎様式」は価値、義務、行為ルールの合意に基づく規範的規制を意味し、「貢納様式」は政治的に制度化された強制を、そして「資本主義様式」はあらゆる対象の商品化と価格設定型市場ないし制度による調整を意味している。どの様式が支配的であるかによって、世界システムは次のようなタイプに類型化される。Ⅰ. 血縁基礎様式支配型：A. 無国家・無階級社会，B. 首長制社会，Ⅱ. 貢納様式支配型：A. 初期

国家型世界システム(低地メソポタミア, エジプト, インダス, ガンジス, 中国, メキシコ, ペルー), B. 初期征服型帝国(アッカド, 古王国エジプト, マガタ, (西)周, テオティワカン, ワリ), C. (帝国, 国家, 辺境地帯から構成される)多中心型世界システム, D. 商業国家基礎型世界システム(アフロ・ユーラシア世界システム), III. 資本主義様式支配型: A. 16世紀以降ヨーロッパ中心型システム, B. グローバル近代世界システム。

このような広義の世界システムの定義と類型化を前提にして, システムがどのようにその内容を変換 transformation させていくかに関し, チェイス=ダンとホールは次のような作業仮説を提示する(Chase-Dunn & Hall 1996: 18-19, 1997: 48-51)。

1. 社会間における支配の安定的関係は, 社会内での階層的社會制度が不在である下では, 創出・再生産することが困難である。血縁基礎型社会システムでは最小短命の中核/辺境ヒエラルキーになりやすい。
2. 中核/辺境ヒエラルキーの安定と搾取の程度は, 中核社会内の階層化の程度と権力テクニクの発展とともに増大する。集権の帝国が現れると, 中核/辺境ヒエラルキーはより安定的, 階層的になり, 辺境地域はより低開発になりやすい。
3. 市場形態(交換, 貨幣制度, 局地・遠隔地市場取引)が成長すると, 逆流効果よりも拡散効果の方が増大する。すなわち, 辺境地域は中核地域の社会的技術的特性をすばやく採用する。
4. 半辺境地域は, 社会変化に重要な役割をはたす。それらは中核と辺境の要素を新しい方式で結合させるため, 社会的革新にとりきわめて豊富な地域となる。

チェイス=ダンとホールの再定義は, ウォーラステインの「世界システム」理論を最大限, 前資本主義社会に適用できるように一般化しようとしたものと判断できる。しかし, 資本主義世界経済のルーツを16世紀の「ヨーロッパ世界経済」にもとめるウォーラステインにとって, それは必ずしも意に沿ったものでなく, 一般化によってむしろ根底に存在する「近代世界システム」の特異性をぼやかしてしまうと映ったようである(Wallerstein 1993, 1995)。また, ウォーラステインの中核/辺境の支配・従属関係を「世界システム」理論の中核と考える研究者にとっても, 社会的相互作用(またはネットワーク)を本質

とするチェイス＝ダンとホールの再定義は「世界システム」の名称を付するに値しないものと映る (Stein 1999: 24-25)。先史時代の適用については、ウォーラーズテインの従属理論という基本的前提を修正せざるを得ない。しかし、その修正はむしろ「世界システム」理論の効用を損なうものであり、適用を控えるべきだという判断もでてくる。同じ相互作用を前提にしながらも、そこで想定されるシステムは、特別な商人集団によって媒介される交易ネットワーク、すなわち交易ディアスポラとして解釈すべきであるという考えも出てきている (Stein 1999: 46-55)。

ウォーラーズテインの「世界システム」理論が、システム理論の発想法と構成要素間の支配・従属関係という2つの原理で組み立てられていたことは確かであろう。その理論の適用を前近代社会にまで拡大させたとき、後者に対する修正と再構築が迫られる。その結果、それを是とするか非とするか、議論が分かかれ、分裂状態を引き起こしたことも確かである。しかしながら、「世界システム」の考えがもともとシステム理論の思考法から派生していることは否定しようもない。政治・文化的要素を巻き込んだ経済的相互作用という視点は、世界システム・パースペクティブを受け入れる研究者にとって共通の基盤となっているのであり、その意味でチェイス＝ダンとホールの定義は、システム論的発想を保持した、許容可能なぎりぎりの折衷案であったといえよう。

彼らの枠組みからは、フランクによる5000年以降の世界システムの継続性を「アフロ・ユーラシア世界システム」(500 B.C.E - 1400 C.E.) としてとらえ、ウォーラーズテインによる近代世界システムは16世紀以降のヨーロッパ中心型システムないしグローバル近代世界システムとしてとらえて、蓄積様式の転換期として16世紀をみるという図式が浮かび上がってくる。16世紀をどのようにみるか、ヨーロッパ中心型(または環大西洋経済圏)システムをどのようにとらえるか、システムの連続性と不連続性が結局問い直されてくるのである。この構造的な問題を筆者なりに問い直していくために、第4節で(アフロ)ユーラシア世界システムをもう一度追跡して、その性格を問い直していくことにしたい。ただ、そこへ直接入る前に、「システム」「ネットワーク」の内容を確認しておく必要がある。

3. 「世界システム」の経済学

システム理論の創始者であるフォン・ベルタランフィによれば、システムとは相互関係にある要素の複合体として定義されるものであり、システムとシステムの環境(外部)とは一義的な境界を生み出す。また、システムには閉鎖システムと開放システムの区別があり、前者の特徴はホメオスタシスとして全体が維持され、平衡状態に到達すると、環境のいかなる変化によっても変化しないところにある。それに対し、後者の開放システムは、全体を維持しながらも平衡状態に達することがなく、環境との交換を通じて内部を変化させられる体系である。

最近のシステム理論は、このような開放システム、ないしはシステムと環境の関係を発展させる形で、自己組織化 self-organization のパラダイムを組み込んでいる。環境の変化は、単線的にシステムの内容を変化させるのではなく、変化を刺激と受けとめ、システム内の組織を自ら変化させていくということであり、自己に固有の作動様式に準拠しながら、自己の内的状態を制御していくという、オートポイエーシスの影響を強く受けているのである。⁶⁾

ウォーラーステインの理論がシステム理論の発想に基づいていること、そして「世界」と「システム」の言葉自体が同一の思考基盤に乗っていることは、以上の紹介からでも容易に確認できるであろう。「世界」は政治的文化的集団を包摂した総体のことであり、それら要素は分業体制による相互作用を形成しているシステムである。各要素は中核と辺境という構造を形成し、外部とはシステムへの影響がほとんどないという形で接触しているにすぎない。内部の(とくに中核の)重心移動が内生的に発生して、付随して境界領域の変更は辺境の領域を変え、中核/辺境の配置を変化させていくという、システムの拡大(または縮小)をともなった自己組織化的なシステム理論の思想が確認できるからである。

さらに、システムの構成要素がサブシステムを構成することは可能であり、原理的に多層のシステム構造を構想することができる。サブシステムの間の相

6) システム理論の解説については、例えば Kneer & Nassehi (1993 [訳 1995]) を、自己組織化については、今田(1986)や Krugman (1996) が参考になる。

相互作用からシステムが構築されるとき、サブシステム内の相互作用の強さとサブシステム間の強さの程度によって、システムの性格が決まってくる。前者が後者より強固であれば、システムはほぼ分解可能となり、短期的には、サブシステムは自律的な行動をとることができる（Simon 1969: 訳 161）。前節でふれた「諸世界間システム」がこのようなシステムとサブシステムとの関係を前提にしたものとするれば、サブシステム間の相互作用を規定する作動様式がどのようなものであるか、またオートポイエーシスに似た様式をもちえるのか、といった視点はきわめて魅力的なはずである。もちろん、構成要素がどのようなものであり、どのような行動原理で行動するかを具体化する必要があることはいうまでもない。

ウォーラーズテインであれ、ブローデルであれ、またチェイス＝ダンとホールであれ、そのシステムの構造が多層であり、要素間の相互作用をもたらすものがおもに分業という経済的な要因で形成されていることに異論はないであろう。対象が基本的にさまざまな人間で構成される、階層をともなった社会集団であることはいうまでもない。そこで発現する経済のみならず政治・文化的側面を含めた社会集団の行動が、相互作用の基本的因子となる。システムが多層構造であることを表現するには、ブローデルが提唱した3つの世界を想定することが有益であろう（Braudel 1976, 1979）。彼は、近代以前（対象は15世紀から18世紀であったが）の経済を物質生活、市場経済、資本主義にわけて、多方面から分析を行っていた。

物質生活は、ほとんど自給自足で生活が営まれる共同体（農村社会）を想定し、日常性もしくは慣習的行動が支配する世界である。もちろん、完全な自給自足ではなく、収入から多様な形で租税が徴収され、残りの一部は必需品の交換のために使われるが、多くは共同体内の生産・消費もしくは共同体間の互酬で完結し、日常的な繰り返しの生活が行われる世界である。社会の多くの人々は、この世界で生きていることも忘れてはならない。この部分がシステムの底辺部を構成している。それは強固でほとんど閉鎖的（しかし依然として開放的）であり、システム内の大部分を埋め尽くしている。

他方、市場経済を形成する階層は、人々が集住する場所、すなわち都市を背景にしている。都市の人々を支える食料品ないし労働力は、周辺の農村・共同体からもたらされる。それは、租税・貢納ないし地代または労役として強制的

に抽出されたものであったり、都市で生産されたり他の場所から供給される商品との交換により得られるものであったりする。前者の担い手は、地方レベルでの宮殿、政府、軍団基地、神殿などの地方権力者(首長、領主、総督、将軍、神官)であり、そこで従事している構成員(役人、兵卒、下級神官)たちであり、さらに都市農民、手工業者、商人、労働者、奴隷などが含まれる。

都市住民を支える食料品は、第一義的には周辺の共同体から抽出されたものかもしれないが、住民の消費はそれだけでは決していない。階層的に高位者ほど所得は多くなり、消費は多様になる。生存のための消費だけでなく、地位・身分に応じた奢侈的・顕示的消費が多くなる。租税・貢納は単調になりがちである一方、消費は多様である。都市内で、または都市間で消費を充たすために農産物以外の財・サービスの供給者が現れ、媒介者(商人)が介在し、交換が多様化するのである。もちろん、社会的関係を維持するため、都市住民間の互酬的な(贈与といってもよい)財の移動はありうる。しかし、それらは特定のなものであり、都市の多様な消費をみたすほどではない。交換の領域は、供給を生み出し維持するという組織上の効率性も手伝って、商人という媒介者を通して都市の間に浸透していくのである。⁷⁾

都市の間には階層があり、その上位には権力者と関与する特権階層が集住する大都市が存在する。政治、経済、宗教などの面で上位にある権力者達が居住し機能を果たすセンターというべき空間である。大都市(センター)は政治、経済、宗教などの領域を統合的に果たす場合もあれば分立している場合もある。いずれにせよ、周辺地域のみならず、従属的位置にある都市からの貢納、租税、寄進、労役負担などを集中させることにより、第一義的に大都市の住民の生活は維持されている。とくに、政治的、宗教的センターとしての大都市は、従属的な下位の都市からの租税(貢納)・寄進機構を通じて維持されており、物流集中化のための経済的機能をそなえている。

また、センターであるがゆえに大都市は大消費地であり、しかも威信の機能をもった奢侈品の消費を含めてその消費は大規模で多様である。それを供給させるために交換の領域が活発化することは先に述べた通りである。特殊な製造

7) 交易が商人を介し発展すること、商人は交易共同体を形成し、受け入れ社会との交流の間接的媒体になること、さらにそれら交易が国家に先行するであろうことについては、Klengel(1983: 訳10-19)、Curtin(1984: 訳33-37)を参照。

品などは職人などを内部組織化して支配下におくことはできるが、奢侈品の一部分またはその素材の供給は権力者の支配がおよばない広範囲の領域にまたがる。その領域に至るには、交換の機能がどうしても必要であり、さらに直接的な管理をともなった内部組織化が規模とともに非効率化する傾向にあり、取引の多様化と広域化は、時代を問わず、代理・委託を通して交換によって対応せざるをえない。⁸⁾

とくに大都市という権力に裏付けられた大消費地の間において、交換の領域はある種の特異な機能を付随的に発生させる。それが、ブローデルのいう「資本主義」であり、資本投入を通じて絶えざる利益追求をはかる、投機性が高くもある活動である (Braudel 1976: 訳 73-74)。ブローデルの定義は、「資本主義」をある時代に特有の経済的な形態として、もしくは時代特有の概念として沈殿化させるのではなく、前近代にも適用可能な無時代的な概念として導入されているところに特徴がある。前近代においても、全生産物に比べて小さいといえ、大都市という最終財の大消費地の存在は、交換による資源配分の変化を促すのであり、商業を通じてその効果は辺境地域や別の中核地域を含んだ広範囲の領域にわたる。奢侈品交易という商業の分野は、その性格上、投機性が高いとはいえ、利益性も高く、古来から「資本主義」が活躍する場のひとつでもあったのである。

ブローデルの想定した3つの世界は、共同体相互間の小世界、周辺を含めた都市間のネットワーク、そして大都市を結びつける広域の交易網と重なり合う

8) 組織をどのような形態に設計するかという、アーキテクチャの視点からもこの問題を分析することができる。何らかの作業を行うタスク単位集団がともに影響を受けるシステム的な環境パラメータと個別的にしか影響を受けない個別環境パラメータがあり、情報の観測精度と単位相互間調整の様式の違いによって組織の利益が異なってくる (情報効率性)。様式は、システムの環境情報がある単位が認知し他に伝達指令するヒエラルキーの分割とそのシステムの情報を共有化する情報同化型 (もしくは認知せず独立化する情報カプセル化型) に分けられる。青木昌彦によれば、「ヒエラルキーの分割は、相互に補完的なタスク単位の環境が高い相関を示し、タスク単位間の情報処理能力に顕著な差異があるときに、より情報効率的であると予想される。」(青木 2001: 訳 118) 逆に、システムの環境と個別的环境に関する情報処理が同程度に重要なときは情報同化が効率的になるし、また個別環境パラメータの変動の方が非常に大きければ、個別処理型の情報カプセル化が効率的になる。交易の多様化と広域化は、環境的情報の多様化・個別化をもたらし、また前近代社会の情報技術では交易情報処理に関し、権力者が圧倒的な優位性をもつとはかぎらない。遠隔地交易に関しては情報のカプセル化がむしろ進行し、商人間では情報共有化が進行するものと予想される。

とみてよいであろう。⁹⁾ それらの世界を社会的に結びつける原理として、ポランニーの「互酬」, 「再分配」, 「交換」が多重に働いているともいえる。しかし、ここではポランニーの社会統合の原理を尊重しながらも、財・サービスという物理的な流れとその背後にある社会的関係に注目し、財・サービスの流れを社会的な意味合いを含んだ「社会的交換」過程として原理的に理解することにしよう。社会的交換は、単なる物質的な財の双方向的な移動だけでなく、社会的関係という対価に対する財の一方向的移動も含んでおり、より包括的である。例えば、互酬（贈与）は、共同体内の社会的関係を維持するために行う成員の継続的な一方向の財・サービスの移動といえるし、貢納は外敵からの安全保障ないしは権力者自身による暴力に対するやむを得ざる対価と解釈できる。社会的交換は経済的交換を包含し、また一時的なその場限りのスポットの交換に限定されるものではない。交換は、無条件で自発的であるとは限らず、ある社会的関係の下で意思決定される制約的なものも含まれ、その関係が続く限り、交換は継続的になりうる。

交換がこのように広義に解釈されるとき、財・サービスの交換（経済的交換）の場合であっても、取引する同士にはある社会的関係が組み込まれ、対等であったり、従属的であったりする。取引の条件も相手によって無条件であったり、条件付き・限定的であったりする。そこには相手の地位・身分、広くは社会的背景によって関与の条件が変わるといって、社会的な部分が含まれている。¹⁰⁾ こ

9) 松井透は、市場の空間的広がりを3層にとらえ、狭義の市場、広義の市場（市場圏）そして市場圏の連鎖という名称で区別している（松井 1999: 8-13）。ここではこの定義に従って理解されてもかまわない。都市間の階層的構造は、製造物生産基地としての都市と農産物生産地帯としての農村の間の分業体系から、交換理論を使って説明することができる。都市間の階層は、輸送費用と消費選好度の異なる製造物を幾つか組み合わせることによって説明可能となり、大都市はすべて製造物を生産する基地として説明される（Fujita, Krugman, Venable 2000: chap. 11）。また、都市間の貢納関係を前提にして階層構造を説明することも可能である（明石 2002）。

10) 関連して、共有財（コモンズ）の生産と、付随する外部性（ただ乗り、過密化）の抑制メカニズムが社会的交換を通じた制裁・脅迫（または共同体規範）によって自己拘束的に保証されることが認識されてきている。共有財生産や契約履行に関わる協力的行動が実現されるように、社会的ネットワークのなかに取引の領域が埋め込まれていると考えるわけで、この「社会的埋め込み (social embeddedness)」の視点からグラノヴェッター (M. Granovetter) が評価されてきている。価値・規範のシステムが外生的というより、部分的には戦略的な理由で、内生的に形成されうるものであり、経済主体が人的関係やネットワークのなかに埋め込まれることにより、信頼関係を醸成し、不正行為を阻止しようと主張されている（青木 2001: 60）。

の視点でみると、商人とりわけ「資本主義」的な活動をする大商人は、その活躍の舞台を最上層の大都市に置いているわけであり、多様な奢侈品の消費を行う「得意先」は最初から権力と結びついている階層である。つまり、商人と商人の取引はいざ知らず、最終需要者と商人との関係は単純な買い手と売り手で済まされない関係を含んでいる。権力者が実力の及ぶ範囲で取引活動上の制約を課してくるとき、それを解消する代価を支払わなければならないし、その他についても暴力という実力（脅迫、強制）または宗教的権威という脅迫（神罰、破門、異端など）をもって要求してくるとき、従属という代価を払わなければならないであろう。特権的な大商人は、その地位と裏腹に権力者への奉仕という従属的な関係を果たさなければならないことが多いのである。¹¹⁾

ところで、交換はその領域に市場という集合的な交換の場を形成する。現象的には（定期）市、バザール、オークションを始め、取引所のような組織的な形態までさまざまであるが、市場を広義に解釈すれば、相対取引、管理貿易、固定価格取引なども「市場」に含められる。対して、ポランニーのように、需要と供給が提示されて価格調整が行われる交換の場を市場と称し、市場経済は単なる市場要素の集合でなく、労働、土地も含めた全体の資源が市場機構を通じて配分される体制とする、より厳格な定義もありうる（Polanyi 1977: 訳 230）。しかし、経済学者が想定するような（完全競争）市場経済は、前近代だけでなく、現代においてさえも、互酬と再分配の原理に基づく財・サービスの一方的移動を重要な部分でも排除できていないという意味で、存在していない。¹²⁾ む

古代の商人が信用をともなった契約を結ぶ際に、保証人や仲介人を介するだけでなく、神のもとで誓約するという「神の契約」を介在させるのも、取引領域の社会的交換領域への埋め込みの一形態といえるであろう（Silver 1995: chap. 1）。

- 11) 商人階層の社会的地位の低さにもかかわらず、ブローデルは次のように述べている。「資本主義は、結局のところ、その財力と権力の基礎を固めるために、商取引、高利、遠隔地交易、行政上の「役職」、それに、土地といったものを次々と、あるいは、同時に食い物にしてきたのである。」（Braudel 1976: 訳 105）
- 12) 前近代（とくに古代）社会は、ポランニーが強調するほどには、交換や市場の領域が他の互酬や再分配の原理に圧縮され、埋め込まれていたとはいえないことが指摘されている。交易港にしても取引が固定価格体系下で管理されていたというより、交易当事者間で取引総額を一致させるように交渉により各品目の価額が調整されていたということであり（Curtin 1984: 訳 90-100）、また交易上、互酬、再分配、交換のどれが先に出現したかで、順序があるわけではなかった、と主張されている（Curtin 1984: 訳 133-34）。古代においては至るところに交換ないし市場の存在が窺われ、価格による需給調整が働いていたとも指摘されている

しろ、交換という機能は、市場という洗練された形態に進化しながら、貢納・租税・奉仕と贈与、給付、祝祭・儀礼などの再分配機能を補完するように発達してきたということであり、再分配経済が存在しその規模を拡大するには、交換の機能を発達させなければならなかったということである。

財・サービスの一方的移動は、租税・貢納という形で再分配の重要な側面を担うが、社会的交換の視点からみれば、安全保障と脅迫、魂の救済と神罰といった選択の余地の乏しい社会的束縛の代価であり、継続するという意味で制度化された社会的交換である。それが有効に機能するには、脅迫と神罰の制裁を実行する法的、軍事的、宗教的機関が必要となる。しかし、その維持には費用がかかるのである。さらに、社会的不満を吸収するためには、祝祭、儀礼、外征、公共事業などの支出が必要となる。このような費用と支出の見返りに、それらの機能が発揮するために必要な財・サービスが入手されなければならないが、それにはその生産部門を直接管理下におくか、交換により入手するかを選択が出てくる。結局、組織化と市場化のどちらにせよ、費用がかかるのであり、どちらが効率的であるかによってその選択が決まることになる。消費の規模が大きく範囲が広がるにつれて、直接管理の分業体制は多様性に対して非効率的になり、自発的な交換に原理をおいた分権的な分業体制の方が有利になる。消費と生産のギャップは媒介者を通じた交換（市場）活動を通じて埋めるか、消費の多様化をある段階で断念するか、の判断をせざるをえなくなるのである。

前近代において（その時間帯は長大であるが）、経済システムの変化を考慮するとき、2つの系統を念頭に置く必要がある。ひとつは、財の一方方向移動を司る部分であり、権力・権威という社会的関係に裏付けられたサブシステムの変化である。もうひとつは、双方向の物財移動の部分であり、自律的な意思決定が基盤にあって財の生産と流通に多様な発想がなされ、実現に向かう動きが育まれる部分である。これらのサブシステムは互いに混合し、補完しあって変化していくことも忘れてはいけない。

政治的な権力に促された生産と移転の部分は、権力がおよぶ水平的範囲とそれが浸透する垂直的階層に応じて、内容を異にする。権力が暴力の見返りという社会的交換を下層の集団に継続的に迫るものであるならば、上位と下位の政治的集団の交渉力に対応して貢納の内容が決まってくるからである。一方的な

(Silver 1995: chap. 5)。

強制はありえず、暴行の行使には費用がかかる。下位の政治的集団（最下層の共同体成員も含めて）は、絶対的な服従はせず、なんらかの抵抗を示すものである。最高権力者は、支配の有効化をはかるため、制裁機構を構築するが、費用を伴う点で絶対的でなく、儀礼、軍事的誇示、神格化など、権威を制度化して支配を恒常化しようとする。それでも、権力の集中化は継続しがたく、その分権化が生じ易い。¹³⁾ このように支配の相対性を前提にすると、その経済的側面である財の一方向移動（租税・貢納）が政治・軍事的権力の強弱に応じ変化するという性質が確認されるのである。

他方、交換の領域は権力・権威という枠組みの中で、商人を介したコミュニケーションのネットワークのなかで、その多様性を目立たぬ形で拡大させていく。中層の都市と周辺共同体との間の交易、ならびに都市間の交易網は、奢侈品だけでなく、生活必需品さえも対象となって、交換の範囲を次第に拡大させていく。その発展の基部は、交換媒体（貨幣）の創出、度量衡の統一化、伝達媒体（文字）の使用、司法制度、交通手段の発達、治安の維持などである。先に述べたように、交換はここでは社会的関係を含んだものとして捉えられ、互酬的な移動とも重複した曖昧な性格をみせる。共同体内や間で観察される互酬的關係は、一部貨幣との交換という形で形態を換えていくが、価格の固定（公正）性や互酬的な取引関係などは、継続してとりおこなわれる。また、都市への余剰生産物の売却や製造物の購入などは、分業化の動きを強め、多種多様な生産物（生活用品）の情報は、各都市の間で商人のネットワークを通じて流れ、財の移動を頻繁にさせて分業化をさらに時間をかけて着実に進行させるのである。これが、ブローデルのいう市場経済の領域であり、生活必需品中心の薄利な商売の世界である。これは、けっして15世紀から18世紀の欧州の世界に限ったことではないのである。

「資本主義」的商人が活躍する世界は、権力者達または高所得階層に社会的関係をもって取引を行っている点で、さらに制約的であると一見思われる。しかし、政治的権力の領域は流動的でもある。特権と奉仕は裏腹であり、権力の

13) 前近代の国家（帝国）の規模はかなり小さかった、つまり広大な領土を実質上支配した期間は短く、多くの期間は地方が政治的に自律した、分権的な状態にあったと指摘されている（Feinman 1998: 102-3）。長期的に効果的な支配を広範囲に及ぼすのは困難であるという主張である。支配関係の優劣を経済的側面から管理者・代理人モデルを使って説明できるが、これについては明石（2003）を参照されたい。

およぼ範囲の中で代理人として行動することは利益と危険がともなう。しかし、遠隔地交易は、別な意味で危険がともなうが利益もうみだす。重要な点は、広域の交易は政治的権力の範囲をまたがって行われることであり、政治的集団とのインターフェイスの役割をはたして、重複した社会的関係をむすぶことである。そこに単純な従属関係を越えた自律的な、交渉力をもち企業家精神に充ちた行動が考えられるわけであり、代理人としての行動だけでない、自己利益追及の余地が生まれるのである。¹⁴⁾ 政治的権力に翻弄されるリスクをもちながらも、それを分散させる知恵が蓄積されるわけであり、宗教的権威をふくめ、複数の権力にまたがって危険を相殺する(寄進行為などがそうである)とか、商人の共同体(交易ディアスポラ)を形成して相互保障体制を構築するという動きがでてくるのである。大事な点は、この領域はあるときには政治的な権力の世界(帝国)に包含され、その制約と恩恵をうけるが、本質的には複数の政治的権力(センター)にまたがるネットワーク(商人集団)であり、政治・軍事的境界が縮小しても遠隔地交易網は保持・拡大しえることである。¹⁵⁾

もちろん、「資本主義」は商人のみの世界ではなく、資本を投入するという意味で、特権階層がその財力を多方面に投資をするところにも出現してくる。それらの人々は、圧倒的に土地に投資をすることがおおいのであるが(前近代では、安全性や利益の安定性の点から合理的である)、一部は商業や事業に代理人を立てて投入し、その利益の一部とともに回収することも行う。権力を分かち特権階層は、領主であり、高級官僚であり、地主である一方、「資本家」でもあるという多面的な表情を見せる。前近代においても、強制という一面的な経済的關係に限定されず、地位に結びついた財力に基づいて利益を追求するという部分が進展して、代理人や企業家との契約関係が発達することもありうるのである。¹⁶⁾ さらに、権力者達が自己の領土のなかで入手できない貴重品・素材

14) 例えば、古代メソポタミアにおいて国家や神殿がその「資本」を使って交易に従事し、代理人として商人がその実務を担当したと考えられている。この「資本」家的行動は、公私の区別がつきにくい上に、代理人の行動にも公私の区別がつきにくいものであった(Silver 1995: chap. 3)。それでもウル第3王朝崩壊後には、国家・神殿の役割は減じ、利益追求の私的企業行動が盛んになり、出資形態もリスクを分散するように多様化していった(Klengel 1983: 訳 63-68, Curtin 1984: 訳 108-12)。

15) 商人共同体(または交易ディアスポラ)については、Curtin (1984)を参照。さらに松井(1999)、深沢(1999)も参照されたい。

16) 先に述べたように、「資本主義」は富の拡大をめざす一連の行為を表しており、それが可

を欲するとき、その手段は交換だけでなく、収奪もありうることを忘れてはいけない。彼らは、「資本家」だけでなく、「帝国主義者」にもなりうる。¹⁷⁾ その意味で、交易と貢納は代替的な手段である。しかし、それらは固有の費用をとまうのであり、帝国は無条件で成立するものではない。

ひとたび、政治・軍事的領域が安定化すると、その領域が広範囲であるほど、その統治のためには租税・貢納というサブシステムのみならず、交換・市場取引というもう一つのサブシステムが補完的に機能せざるを得ないことは、先にふれたとおりである。交換の領域が活性化するにはその基盤である、貨幣、交通手段、信用制度などの発達が必要である。それらは、政治・軍事的領域とは別に交易の担い手（商人、運輸業者、金融業者）の間で自然発生的に創出され、発達することが可能である。しかし、その内容は局地性が強く、統一性にかけるものになりがちである。貨幣、度量衡、法体系、公用語、文字の統一などは広範の領土を支配する帝国が成立して、実際可能となる。それらは、また帝国の統治にとっても必要不可欠な事業である。体系的な統治政策の実行のみならず、租税・貢納の徴収という帝国財政の基盤を形成する部分については、直接的な現物納は領土がひろいほど非効率的になる。統治費用を節約するには、貨幣納が必要であり、それが実効化するには市場取引ないし商業が発達していなければならないのである。帝国の広域化は実は物理的な征服という側面のみならず、貨幣経済の発達という側面が付随していなければ、実現できない。貨幣の統一化と大量発行、そして道路網の整備と治安の維持は、帝国にとって不可欠の統治政策となったのである。

経済循環という財と資金の流れを帝国の経済にあてはめて眺めてみると、租税・貢納による資金の集中は、官僚、軍隊、戦争・公共事業などへの支出となって還流する。その際、貨幣納は各地での生産物の市場売却を通じておこなわ

能となる範囲は古代では限定されていたことは確かである。しかし、裕福な「資本家」が農業、鉱工業、建設業、商業などに投資をし、企業者・管理者、技術者、労働者を雇い（奴隷を賃借し）、生産物を市場に売却して収入の中から費用を支払った後、利益を回収する行為は、古代において頻繁に見られたのである。製造業者の規模は概して小さく、投資先は圧倒的に農業方面であったけれども。ギリシャ・ローマについては例えば、Friedman (2000: 136-38)、Greene (2000: 43-44)などを参照。

17) ローマの拡張主義（帝国主義）が内在的要因にもとづいて、とくに経済的動機づけから影響を受けていたことについては、Harris (1979: chap. 2)を参照。また古代の帝国主義と世界システムのより一般的な議論については Ekholm and Friedman (1982)を参照。

れ、生産物は消費地である都市さらに大都市へと流れていく。他方で、政府支出や特権階層の多様な消費は、それに見合うように供給を生み出し、製造業、建設業、サービスなどへの分業化を促す。さらには貴重品や素材を入手するための遠隔地交易を発達させる。大部分は農業で占められるとはいえ、その他の部門は高度の分業化が促されるのである。¹⁸⁾

交換・市場の領域は、「平和」という環境の下では、着実に浸透するように拡大していく。それは、帝国と帝国をむすぶ遠隔地交易の領域をふくめて、多層の領域で展開し、最後には、日常生活が営まれる物質生活の世界にまで浸透してくる。重要な点は、政治・軍事的境界は、交換領域のパターンに影響を与え、変化させるのであるが、交換という経済の領域は政治・軍事領域を超えて展開し、それも不可逆的であるということである。交易のルートは、国家間の紛争により変更されるが、商人達は交易の利益がある限りそのネットワークを駆使して新しいルートを開発しようとする。交易ルートは消失せず、そのパターンを変えるに過ぎないのである。その意味で、前近代において世界帝国と世界システムを同一視する姿勢は、経済システムの柔構造という本質を見過している。

政治・軍事的領域は隆盛と衰退を繰り返し、境界を変更させるが、各層の商業ネットワークは分業化と交易の利益があればその密度を不可逆的に高めていく傾向をもつ。軍事的衝突はその密度を低下させるのであるが、交易の利益は代替的なルートを開発してネットのパターンを変更する。商業ネットワークはその意味で国家（帝国）を超える存在であり続けるのである。前近代における世界システム＝世界帝国の構図はむしろ例外的であり、世界帝国を超えた世界

18) 帝国支配と貨幣経済との補完関係は、ローマ帝国でも、漢帝国でもみられた (Hopkins 1980, Greene 1986: 訳 135-36, 2000: 49, 西嶋 1981: 207-9, さらに足立 1990)。帝国の経済運営は、再分配システムだけでは不十分であり、実物の財貨を集積しかつ特権階層の多様な消費をみたすには全国的な市場機構の成立が必要であり、そのためには貨幣（交換媒体）と商人のネットワークが必要とされるのである。この補完的機能は、最も再分配的経済と考えられてきたエジプト新王国でもインカ帝国においても見られる (Warburton 2000: 172-73, 関 1997: 251-53)。ただし、それ以上に留意しておくべき点は、帝国を貢納型様式にはめ込んでしまっ、その様式が、政府財政が基本的に租税によって成立している事実の別表現にすぎないことを見逃してはならないことである (Frank and Gills 2000: 9)。近世の主要な帝国においては、貨幣経済の進行のなかで、貢納も賦役も金納化されてしまう傾向がみられるのであり、その点で近代国家との相違は必ずしも明確ではなくなってくる。

経済は一時的ではなく、恒常的に帝国を包含して拡大し続けるといった方がよいのである。このように、シュナイダーの述べる前資本主義時代のユーラシア大陸の「世界経済」は経済学的にも十分に議論に耐えられるものであり、たとえ帝国内の「世界経済」であっても、政治的構造を補完し、逆にその構造を変更しうるほどに自律的となりうる、という視点もうけいれる価値がでてくるのである。

4. ユーラシア世界システム

北アフリカを含めたユーラシア大陸が地理的に東西に位置しているため、動植物、技術、文化、そして病原菌さえも伝播が早く、定着しやすいことが指摘されてきた。気候帯が同質であるかは、外来の生物が定着して生存するかに大きく影響をあたえる。他の大陸では南北に展開しているため交流があっても風土的に定着しにくく、品種、技術、文化が孤立しやすいのである。ユーラシア大陸の拠点となる地域で発生した文化ないし文明が、じきに隣接地域に伝播しあって、影響しあう可能性が高いことは、その地理的な特質から予想しうることである (Diamond 1997: chap. 10)。

ユーラシア大陸の地理的特徴は、生態系との関連から図式的に描写することができる (梅棹 1967, 松田 1992, 高谷 1997)。梅棹忠夫の図式を参考にすれば、ユーラシア大陸は乾燥地帯が南西 (サハラ砂漠) から北東 (ゴビ砂漠) へ連なっており、それを境に東西に分け、さらに東西をそれぞれ二分して、4つの世界 (中国、インド、ロシア、地中海・中東) に分けられる。各地域の境界には、山脈・高原が走っており、南インド・東南アジアと北ロシア・シベリアはそれぞれ熱帯、亜寒帯性気候で湿潤であり、南よりの極東部と北よりの極西部は温帯性気候である。4大文明は中国、インド、中東という3つの地域の (準) 乾燥性気候下にある大河流域で発祥したのであるが、後に人口が集中する長江流域、ヒンドスタン平原、欧州の温帯地域は、それらからはずれており、後の時代になって中核となっていく地域である。さらに、中央に位置する乾燥地帯は遊牧民族が活躍する地域であり、陸の道 (シルク・ロード) を通じて収奪・破壊と交易を行いつつ東西交流を担う一方、地中海、インド洋、南シナ海・東シナ海を繋げた海の道を通じてもう一方の交流が行われていた。4つの地域は地理的

には孤立するような印象を与えながらも、陸と海の道を通して古来より相互交流を行い、影響を受けてきたのである。これがユーラシア世界を考える上での地理的背景である。

その中で、農業の始まりから都市の形成、国家の成立そして帝国への発展という、一連の過程がいち早くみられたところが中東とくにメソポタミアである。とりわけ、紀元前4千年紀にみられるウルク期の拡大過程は、都市群の多層的配置、都市内の階級社会化、専門化、神殿・公共施設の建設、辺境地域に至る交易網の展開などを含んでおり、第2節でふれた広義の世界システムの定義に適應するような、中核地域（メソポタミア南部）と辺境地域（チグリス・ユーフラテス上流域、イラン南西部）間の相互作用の世界がみられていた。この中核／辺境関係に従属の関係があったろうとして、これを「ウルク世界システム」として描写する研究者がいる一方で (Algaze 1993), その「帝国主義」的な性格について疑問を投げかける研究者も少なくない。¹⁹⁾

中核地域では主要都市が競合するように成立し、ウルク期後期になるとウルク（ウルカ）が突出するようになる。その規模は都市部で2万人に及ぶとされ、周辺からの食糧の供給なしには維持できないほどになっていた (Matthews 2003: 110)。都市内では、祭司階級だけでなく世俗的な指導者が現れ、専門の手工業者が居住する地区も現れていた。公共施設は大規模化し建設に必要な労働力が調達されるようになっていた。こうした都市内の分業化にともなって、メソポタミア沖積地では手に入らない財（とくに威信財）に対する需要は、遠隔地交易を派生させ、その結果ウルク文化を伝播する、または現地の文化と接触する拠点（飛び地、基地、居留地）が辺境地域に見られるようになる。交易商人が辺境地域に従属化させたかは疑問視する研究者が多いようであるが、商業コミュニティであれ交易ディアスポラであれ、中核都市の代理人としてだけでなく、自己利益追求もはたす企業家的な商人として交易活動を担っていたであろうとされ、辺境地域から一次産品（木材、銀銅、石膏、大理石、黒曜石、羊毛など）を

19) 例えば、ウルク期に関する研究成果を収録した論文集 *Uruk Mesopotamia & Its Neighbors* でも Algaze の「帝国主義」的見解に異論を唱える考古学者は多い。これについては、Rothman (2001) を参照、併せて Matthews (2003: 114-26) も参照されたい。交易商人の自律的活動については Algaze (2001: 71-74) も Stein (1999: 47-54) も同じ立場であるが、商業ネットワークが16世紀以降ヨーロッパ諸国の「商業帝国」のように帝国主義的なものか、交易ディアスポラとして仲介的なものなのかで、決定的な違いがでてきている。

輸入し、中核地域から製造物（毛織物、香油、金属製品など）を輸出したと考えられている (Algaze 2001: 51-54)。

都市間の競争と広域の交易網で特徴づけられるウルク世界システムは、紀元前4千年紀末には崩壊し、中核地域は初期王朝時代に入り、軍事的な覇権をめぐる都市国家抗争の時代にはいる。北部地域の地方分立の動きに呼応するように、メソポタミアの関心は南部のペルシャ湾ならびにイランの方に向けられ、影響力を行使するようになる。政治・軍事的覇権の頂点は、紀元前3千年紀後半に現れる、メソポタミアの最初の統一王朝といわれるアッカド帝国である。アッカド帝国の後、ウル第3王朝、バビロニア第1王朝の成立というように、紀元前3千年紀後半から2千年紀前半まで統一と分裂の時代が前後する。辺境地域征服の目的のひとつが、交易の代わりに重要物資を貢納によって調達することであったといわれるが、交易対象地域を拡大して物資を首都に集中させることも同様に重要であった (Klengel 1983: 訳 38-41)。

3千年紀後半（青銅器時代前期）には、広域にわたって中核地域というべき政治・経済的勢力圏が成立する。すなわち、メソポタミア（アッカド、ウル第3王朝）、エジプト（古王国）、インダス流域である。これらの中継するように、都市国家、首長国の地域（シリア、湾岸地域、イラク高原）があり、辺境として重要物資を供給する辺境・周辺地域（アナトリア、ギリシャ、コーカサス、中央アジア、地中海西部）があった。中核となる拠点地域は、外交的な関係や軍事的接触が直接なくても、中継地点を経由した遠隔地交易網を通じて、物資の移動と文化の交流を行っており、その結果、この中核地域、中継地域、辺境・周辺地域を交易によって連繋する世界システムが成立していた (Kohl 1987a: 20, Butzer 1997: 282-85)。その交易のパターンは、基本的にウルク世界システムと同じである。中核となる3つの地域では、大規模な穀物生産により人口が集中し、織物や金属加工などの製造が行われて分業化が発達している一方、社会的再生産のために必要な威信財・奢侈品の素材が地元で入手できない構造になっていた。各中核地域が調達しうる素材は、隣接する辺境地域によって異なり、製造物にも地域特性が出てくる。他方、交易の中継点となる地域は、辺境・周辺地域から供給される一次産品または加工製品を集積して、隣接する中核地域に中継するという役割を演じる。その交易ルートと中継拠点の位置は、中核地域からの政治的・軍事的圧力により変更することがあるが、システムの崩壊

がない限り、大枠で維持される。

メソポタミアを中心にみれば、イランからはクロライト、大理石、石膏、アラバスターという石材が、中央アジア・アフガニスタンからはイランを経由して金、銀、錫、ラピスラズリ、トルコ石などが輸入されていた。湾岸地域(ディルムン、マガン)からは銅、真珠、なつめやし、閃緑岩が輸入され、インド(メルッハ)からは木材、紅玉髓、象牙、宝石などが輸入され、さらにアナトリア・シリアからは銀、銅、木材が輸入されていた。メソポタミアからは羊毛、毛織物、ごま油、皮革、穀物などが輸出されていた。インダス流域(ハクラ=ガガール流域、インダス下流域、グジャラート)ではメソポタミアと同様に無数の都市・集落が群立し、大麦、小麦、木綿、ごまが栽培され、織物、ビーズ、陶器、銅・青銅製品などが製造されて交易の対象となっていた。交易網はバルチスタン、アフガニスタン、イラン、中央アジア、南インド、湾岸地域にまで及び、木材、ラピスラズリ、紅玉髓、金銀銅、錫、宝石類など一次産品の供給を得ていた。各地域に植民地、居留地、貿易基地を設け、一方のサブシステムを形成していたといつてよい。

エジプトも威信財誇示のために木材、樹脂、瀝青、銅、ワイン、オリーブ油など一次産品をシリア・パレスチナ(レヴァント)に依存していた。中継都市はビュブロスである。エジプトはアフリカ南方(ヌビア)と東方(プント)とも交易(ときには直接支配)をしており、香料、黒檀、象牙などがもたらされた。ヌビア溪谷からは金が採取され、その確保はエジプトの関心事であった。シリア・パレスチナへの輸出には香料やアフリカ産品があったが、主要な支払いは金であったと考えられる。シリアは穀倉地帯であるとともに羊毛や毛織物の産地であり、エブラ、ビュブロス、ウガリットは交易の中継地点であった。すなわち北シリア産の材木、アナトリアそしてキプロスの銅、クレタ島からのワイン、オリーブ油さらにヨーロッパ北部からの琥珀などがレヴァントを中継点にして交易されていた。²⁰⁾

この紀元3千年紀後半の世界システムは、その末期に政治的勢力(ウル第3王朝、エジプト古王国)の動揺・衰退に見舞われ、再編成を迫られる。メソポタ

20) 中東地域の交易全般については、Klengel(1983: chap. 2)、Curtin(1984: chap. 4)を、他にはLarsen(1987)、Morkot(2001)、湾岸地帯はEden(1992)、インドはPossehl(1998)、Chew(1999)、中央アジアはKohl(1987b)を参照。

ミアは南部地域がその生産力を低下させ、北部に中心が移っていった。ウル第3王朝滅亡後、イシン・ラルサ時代を経てバビロン第1王朝時代になるが、前18世紀後半南部地方の経済は反乱のため壊滅したといわれ、紀元前1595年にヒッタイト王のバビロン占領によって滅亡する。エジプトは古王国が崩壊して、第1中間期を経て中王国時代になり、前2千年紀半ばにヒクソスの支配下に陥る（第2中間期）。チグリス上流域ではアッシリア古王国が独立し、アッシリア商人を介してイラン・アッシリア・アナトリアを結ぶ交易網が発達し、またウガリットなどのレヴァントの諸都市を中継基地にして東地中海との交易が結びついていった。紀元前2千年紀後半（青銅器時代後期）に政治的勢力（バビロニア、エラム、アッシリア、ミタンニ、ヒッタイト、エジプト新王国）が拮抗して安定化すると、これらの国々とともにエーゲ海地方や地中海中部も包含する範囲で交易網が成立するのである。ウガリットを始めレヴァント諸都市がハブの存在となり、経済の中心は東地中海に移り、メソポタミアは中核地域からはずれていった（Klengel 1983: 訳 126-27）。

この交易網には、湾岸地域・インドが脱落している。イランの中継都市も衰退し消滅していった。湾岸地帯を介したメソポタミアとインドとの交易は紀元前18世紀半ば頃まで続くが、以後衰退・消滅に至る（Chew 1999: 100）。符合するように、インダス（ハラッパ）文明も衰退していった。この時期、北部と南部を結び付けていたガガール流域が地殻変動により枯渇していったため、インダス流域全体を繋げるシステムが消失し、前2千年紀を通じて北部と南部の分離・地域化が進行した。前2千年紀半ば以降、アーリア人が侵入して、政治・経済的中心は次第にヒンドスタン平原へと移っていき、鉄器時代になり都市が再生して、都市国家時代が始まる。他方、南インドは別の文化圏を形成しインド洋の西と東を中継する性格を持ち始めていくのである。²¹⁾

紀元前1200年頃、東地中海に展開した世界システムは、突然の崩壊に見舞われる。システムの政治的領域を形成していた諸国家と諸都市が崩壊、消滅、衰退に陥るからである。「海の民」の侵攻により、ミケーネ文明、ヒッタイト新王国は崩壊し、シリア沿岸諸都市は破壊され、エジプトは衰退し混迷の時代

21) ハクラ・ガガール流域の変遷から見たインダス文明の衰退過程については、Mughal (1990)、さらにChew (1999)を参照。その後の紀元前1千年紀の経過と都市の勃興については、上杉(1997-98)を参照。

に入っていく。アッシリアも「海の民」により弱体化し、バビロニア(カッシート王朝)は前12世紀末にエラムによって滅亡した。²²⁾

続く紀元前1千年紀の世界(鉄器時代)は、前半は混迷から再生、後半は統一の時代といえる。前半はアッシリア帝国の膨張という現象があったとはいえ、地中海にはフェニキア人が進出して交易圏を構築し、その影響を受けてギリシャ人が地中海東部ならびに黒海に植民都市を築いて交易圏を同じく構築した。地中海中部ではエトルリアが商業圏を拡大し、ローマがその後に続くことになる。イラン高原では中央アジアのルートからインド・ヨーロッパ系のイラン人が進出し、遊牧生活または農耕生活を営んで、ときにはアッシリアを圧迫した。インド・ヒンドスタン平原ではアーリア人が入植して遊牧生活から農耕生活に転じ、リニッジ社会から国家へと社会形態を転換させていった。エジプトでは前8世紀半ばに上ヌビアにクシュ王国が成立し、エジプトを征圧して第25王朝を開いている。²³⁾

紀元前3千年紀末から2千年紀始めに崩壊した、青銅器時代世界システムの版図を復活させるきっかけが、紀元前500年半ばに成立したアケメネス朝ペルシャである。アケメネス朝の領域は、西はエジプトから東はインダス河畔ならびに中央アジアを含み、周辺地域は東地中海ならびに黒海、カザフ草原地帯におよんでいた。帝国の領土は20以上の行政区(サトラペイア)に分かれて総督(サトラップ)によって統治され、総督は貢納と軍役の義務を負っていた。行政区内は伝統的な政治区分に従い分割され、それぞれ自治が認められていた。しかし、総督を含め地方の政治的勢力は王直属の官吏により監視され、制御されていた。

租税の一部は現物で徴収されて地方で支出され、残りは中央へ送られた。銀納分はおもに臨時支出のために蓄積された。高位のペルシャ人は帝国各地に所

22) 大貫, 前川, 渡辺, 屋形(1998: 283, 294-95, 513-15), 小川・山本(1997: 44-46)。青銅器時代の崩壊については、東地中海一帯のカタストロフィの状況と武器の革新による情勢変化を分析したものに Drew(1993)があり、また、この時期、気候・環境面で大きな悪化があり、それが全般的な崩壊の基本的原因だとする分析については安田(1994)を参照。

23) 紀元前1千年紀前半において、国家主導から民間主体型へ交易活動の構造的変化があったとする見解については Liverani(1987)を、また Sherrat(2000: 124-26)によれば、この時期の技術上の革新はグローバルレベルでのシステム変換をもたらすものであった。同時期ギリシャにおける再分配経済から市場への進化と付随して生じた地位と富の関係の逆転については、Tandy(1997), Thomas and Conant(1999)を参照。

領をもち、帝国の支配に貢献していた。軍役を負う兵隊には負担に応じて土地が与えられたが、平和が来ると、軍役は租税（銀納）で負担しなければならなかった。そのため、バビロニアの封土保有者はムラシュ家のような企業者的代理人に委託して金銭的收入を得て納付していた。帝国内では一連の社会的基盤が整備されていた。つまり、主要地域を結ぶ道路網の上に駅通が設置され、度量衡が統一され、銀・銅の貨幣が鑄造されていた。労役については、王室経済の必要に応じ、帝国各地から徴用され、職業分野ごとに集められて集団労働に服したといわれる (Kuhrt 2001: 114-18)。

このようなアケメネス朝ペルシャの統治システムは、経済的には貢納型経済として特徴づけられがちであるが、各行政区に課せられた主要な貢納額が銀単位で計上されていたことを考慮すると、帝国の各地で現物を売却して銀に換えるための市場が存在していたことが窺われる。メソポタミアを含めた東地中海世界では、長い間、銀（ときには金）を支払い手段とした取引が行われていたことを思い起こせば、これは不思議ではない。バビロニアは政治的中心地ではなくても、帝国の物資が集中する経済的中心地であったわけであり、企業家的代理人による土地運用が可能になるのも、帝国の平和と基盤整備に基づいた市場経済の進展を前提にした上でのこととあってよいであろう。²⁴⁾ 前節で述べた貢納と市場の補完的発展をここに想定し得るわけであり、帝国の主要都市を中核として形成される帝国内市場経済（商業ネットワーク）は、フェニキア人と対抗して、地中海と黒海に植民都市を通じて商業圏をはりめぐらせたギリシャ世界と接触してひとつの世界システムを形成していた、と解釈することができる。

ペルシャ帝国は、アレクサンダー大王の東征により崩壊し、その後ヘレニズム世界の成立をみる。ペルシャ帝国の版図内にヘレニズム諸国家が並立する中で、主要な拠点に建設されたギリシャ人都市とそこに居住する（神官、退役軍人、官僚、商人を含めた）ギリシャ人居留民が作り出すネットワークがそれら諸国家の上部構造を形成していた。ヘレニズム諸国家は軍事力を維持し、租税収

24) ペルシャ帝国を発達した貨幣経済としてみることは不確かな部分もあるが、Klengel (1983: 訳 93-95) さらに Snell (1997: 107) を参照。この時期、バビロニア、ギリシャではインフレーションが進行していたといわれる (Klengel 1983: 訳 293, Silver 1995: 165, Friedman 2000: 141-42)。

入を最大にしようとするだけであったが、そこに居住するギリシャ人は国家奉仕のためにその特権的地位を約束されていた。ヘレニズム世界がひとつの世界システムを形成していたとすれば、その特徴はギリシャ文化（民族、言語、宗教を含んだ）が優位性の証明になっていたことであろう (Shipley 1993: 282)。このシステムは、政治・軍事的勢力が一方を圧倒できず拮抗している世界であり、貨幣経済化していたギリシャ本土の伝統をもちこんで、都市を媒介した遠隔地交易が地中海と周辺地域のみならず中央アジア、パンジャブ、ヒンドスタン平原さらに海路により南インドまで拡大した世界であった。交易は貨幣を媒体にして行われ、貢納・租税も貨幣で納められた。諸国家の国王は、貨幣の不足を補うように、貨幣鑄造に励まざるをえなかった。²⁵⁾

ヘレニズム世界の重心は東地中海にあったが、これを受け継ぐようにローマが台頭し、共和政時代から帝政時代を経て地中海を中心とした世界帝国を築く。紀元前3世紀半ばに、中東にはパルティア王国が勃興し、中継地域となる中央アジア・パンジャブ地方には、バクトリア王国、1世紀後半にはクシャーナ朝が成立する。同時期デカン高原にはサータヴァーハナ朝が存在し、海の交易の中継地域となっていた。陸路の遠隔地交易は、シリアからイラン高原を経由して中央アジアへか、ギリシャから黒海を通過してカスピ海を通過し中央アジアへ至り、西域のオアシス地域を通過して中国西北部に至るルートを通じて行われていた。中国（前漢）との接触は記録上、張騫の西域報告による武帝の西域進出に溯るとされ、西暦1～2世紀にはクシャーナ朝とパルティア王国を経由して、交易が盛んになったとされる。しかし、交易に関しては、はるかそれ以前から遊牧民族を仲介して行われていたと考えるのが自然である。²⁶⁾

他方、インドから東南アジアそして中国への海路を通じて交易は、前2世紀後半には行われていた。中国の番禺（広州）からインドシナ半島を回り、マレー半島を越えてベンガル湾を横切って、インド東海岸（コロマンデル海岸）に至る交易ルートができていた。西の方では、マラバル海岸もしくはグジャラート

25) プトレマイオス朝とセレウコス朝の通貨発行については、ロストフチェフの著作 Rostovtzeff (1941: 399-403, 446-51) が参考になる。

26) アルタイ地方のパジリク遺跡では、西アジアから遅くともアケメネス朝期に輸入されたと考えられる毛織物や戦国時代中国から輸入された絹が見つかっている。前漢の武帝によるシルクロード開通以前に、草原の道を通じた東西交渉が成立していたということである（藤川編 1999: 127-29）。

地方からアラビア海を横断して湾岸地域に達し、ペルシャ湾からメソポタミアを北上して、シリアのアンティオキアに至るか、または直接アデンを経由して紅海に入り、エジプトのアレキサンドリアに至る海路が開いていた。

海路の交易に関しては、インドからシリア・エジプトへは、香辛料、宝石、真珠、象牙細工、綿製品、鉄製品、中国産絹、トルコ石、ラピスラズリなどが輸出され、地中海地域からはワイン、オリーブ油、珊瑚、ガラス製品、陶器、銅・錫などが輸出されていた。シリア、エジプトにとっては入超状態であり、金の流出によって埋め合わされていた。他方、中国へは、インドから真珠、ガラス製品、宝石、綿製品などが輸出され、中国から絹織物が輸出され不足分は金で埋め合わされていた。陸路においてもこの交易の構造は同じであった (Curtin 1984: chap. 5)。

このインドを中間に置いたユーラシア大陸の西と東を結ぶ交易網は、西暦1, 2世紀ローマ帝国と後漢の時代に最盛期を迎え、双方の帝国領土から金が大量にインドに流出して、インド産の物品が輸入されていた。これを反映するように、クシャーナ朝やサータヴァーハナ朝では大量の金貨が発行されていた。また、中継地となった南インドのマラバル、コロマンデル海岸の貿易港 (ムージリス、カーヴェーリパッティナム) には、ギリシャ人の居留地があって、一部のギリシャ人商人が中国支配下の北ベトナムまで来訪していたといわれている。²⁷⁾

中国とインドの間の遠隔地交易は、東南アジア地域を経由して、一部はビルマから雲南・四川を経由して、行われていた。中国とインドからの東南アジアへの接触は、両地域間の交易が繋がる以前から始まっていた。コロマンデル海岸からインド商人がマレー半島を訪れ、インドからの綿製品や鉄製品の代わりに、金 (砂金)、香木、樹脂、錫などを求めて来ていた。その過程で、交易のための港市が生まれ、首長制から国家への政治的形態の変化を促し、またインド文化が伝播して、マレー半島、インドネシア、インドシナのインド化のきっかけとなった。他方、中国華北・長江流域の青銅器文化は紀元前12世紀頃に

27) 石澤・生田 (1998: 68-77)、山崎 (1997: 227-31)。インドから西アジア、東南アジアへの海上交流については、前3世紀半ばにはベンガル湾内の地域間貿易が存在し、遅くとも前2世紀末頃には地中海世界との商業上の接触をもったとされる。地中海世界とインド洋世界との交易は、1世紀末には衰退していくが、3, 4世紀以降、ササン朝ペルシャの下でペルシャ湾岸とインドとの取引が活発していく (部 1999: 146-51)。

は中国南部、ベトナム北部に伝わり、前5世紀に鉄器文化が流入するとともにベトナム北部に銅鼓で代表されるドンソン文化が現れた。その後まもなく銅鼓は東南アジア群島部に広まっていった。紀元前5世紀にはベトナム北部から東南アジア各地に交易網が広がっていたと考えられる。²⁸⁾ ベトナム北部は伝統的に中国から影響を強く受けたが、インドシナ海岸には、中国、インド双方からの交易を求める商人が訪れ、中継貿易地（港市）が成立し、双方の文化（とくにインド文化）の影響を受けていた。その結果、二次的国家である港市国家が東南アジア各地に成立するようになったのである。2世紀には扶南、林邑（チャンパ）という港市国家がカンボジアとベトナム南部に出現していた。

中国と地中海を結ぶ陸の道でも同じことがみられた。西域、中央アジア、イラン高原を結ぶいくつかのルート上にオアシス都市が存在していた。その時々、政治的勢力圏にはいりながらも、交易の中継点として自律的に存在していた。この陸の道には北部に草原地帯が連なっていて、遊牧民族が活躍する舞台であった。各部族にとって、農耕民族との交易は必要不可欠であり、ときには団結して略奪行為に出ることがあった。農耕地帯に強力な政治的勢力（帝国）が出現すると、対抗するために、遊牧国家（帝国）が出現した。とくに中国との関係で形成されることが多く、東方に強力な遊牧帝国が出現すると、西方の遊牧民族を圧迫して、玉突きで西方への民族移動を引き起こした。それが西方の諸国家を刺激し、政治的な再編成の契機となったことは、世界史を通して観察されることである。²⁹⁾

以上の、紀元前2世紀後半から紀元3世紀始めにみられた、インドを中継してユーラシア大陸の東西を結んだ交易網、「ユーラシア世界システム」は、以後（おそらく18世紀の半ばまで）の歴史を通じて観られる経済的社会的相互作用の原型であった。歴史の各局面で政治的勢力は変更し、交易ルートの重みも

28) ドンソン文化については坂井・西村・新田(1998:99-110)を参照。雲南・ベトナム北部・タイ東北地方はそれぞれ文化を発展させながらも、相互に影響を及ぼし、固有の青銅器文化を作り出して、周囲に伝播させていったと考えられている。さらに雲南はミャンマー・ベンガル湾に至る交易ルート上にあり、南海貿易の終着点であるベトナム北部ともつながり、四川を通じて中国とも繋がっていた。雲南を中心にして中国から絹織物、塩、インドから香料、タカラガイ、タイマイなどが運ばれる広域商業圏が成立していた。

29) 玉突き現象については岡田(1992)を参照。世界システムの観点からみた帝国と遊牧国家との相互作用についてはHall(1991)、Barfield(2001)、Kradin(2002)を参照。

変わっていくことはあっても、基本的な構図は不変であった。アブー＝ルゴドが13世紀半ばから14世紀半ばまでの世界システムを描いた構図、そのサブシステムを形成する各地域は、そのまま1世紀から2世紀の世界にあてはめることができた。中東、東地中海地域の相互作用は、はるか時代を遡るほど起源の古いものであった。

この世界システムでは、交易は貨幣交換を通じて行われ、中核地域の市場経済化は時間を通して継続的に見られる現象であった。政治・軍事的勢力の衝突により、その進行が妨げられ、交易ルートが変更することはあっても、超長期的には、奢侈品のみならず生活必需品を含めて、分業化が進み、市場を通じた連繫が強まっていった。遠隔地交易にともなう金銀の移動は、バランスのとれたものではなく、一方向に偏ることが多かった。概して、インドには金・銀が流入する傾向がみられるが、遅くとも15世紀以降には中国に銀が流入するという状況が生まれた。

西暦1～2世紀の時代をひとつの頂点として、「ユーラシア世界システム」には幾つかの大きなリズムがみられた。第2のピークは8世紀半ばから10世紀半ばまでのイスラム世界の興隆期に求められる。アンダルシアからインドまでの、ペルシャ帝国を凌ぐ国際商業圏の成立は、バクダットをセンターとして、商業を通じた分業体制の飛躍的な進展をもたらした。その交易網は、各地の拠点都市の成長とともに、確かに奢侈品だけでなく、農産物などの必需品までの分業体制を作り上げたのである（家島1991:317-42）。この商業圏はイスラム圏を越えて、インド、中国へも拡大するものであったことはいうまでもない（石澤・生田1998:131-35）。

第3のピークは、12世紀半ばから13世紀半ばにわたる、アブー＝ルゴドが描いた世界である。ヨーロッパは「商業の復活」により、地中海の商業圏を握る一方、アイユーブ朝はエジプト・紅海・インドの交易ルートを確保して、それを活発化し、中国では南宋時代にあつて、江南地方に高度の市場経済を実現させ、圧倒的な経済的实力を誇っていた。中国とインドを結ぶ、東南アジア群島部を経由した交易は、中国の経済力から派生して活発化していたといつてよい（家島1991:404、石澤・生田1998:217-21）。

第4のピークは、15世紀から17世紀にまでわたる「交易ブーム」に同調したものであった。このブームには複合的な要因が重なっていた。中央アジアで

は遊牧国家の複数台頭と軌轢により、陸路による交易が困難になって、海路への依存が構造的に高まっており、ペスト以後のヨーロッパでは東南アジア産の香辛料に対する需要が増大して、インドからペルシャ湾ないし紅海を経てヨーロッパへ入るといった交易ルートが再び活発化していた。他方、15世紀になって中国は経済を拡大させ、東南アジアの産物に対する需要を増大させていた。東南アジアでも南インドでも海外交易への政治的干渉が弱まり、比較的自由的な商業活動が行われる環境が出来上がっていたのである(大木 1999: 106-7)。

この海路による交易の活性化は、16世紀に新大陸の銀をもって、ヨーロッパ商人が強制的に参入してきて増長し、それとともに幾分システムの性質が変わってくる。ヨーロッパ中核地域と新大陸、アフリカ大陸を繋ぐ環大西洋経済圏がユーラシア世界システムに融合する形で、文字通り「世界経済」が形成されるからである。しかし、ヨーロッパ人の強権的な貿易活動にもかかわらず、その全体に占める割合は大きくなく、到来前と大きな変化はなかったとさえ主張されている。³⁰⁾ 交易の活性化はむしろ、新大陸からの銀と日本からの金・銀の供給であったといえる。しかし、その供給も1621-30年をピークにしてそれ以降急速に減少していった(大木 1999: 122)。銀の供給の減少に符合するように、ヨーロッパ人の強権的な植民地政策は18世紀後半以降、顕著で一貫したものになっていく。ヨーロッパ人の到来とは、武力を振りかざして、それまで現地で守られてきた取引慣習を超えて、自分に有利なように商業を行おうとする商人グループの到来であったのである(松井 1999: 66)。

5. 結論に代えて

近代世界システムの成立を15世紀末にもとめ、「世界経済」というそれ以前まで支配的であった「世界帝国」とは異なる膨張的なシステムの形成をみいだそうとする、ウォーラステインの意図は明快である。他方で、ユーラシア大陸で展開された、世界経済的といえるダイナミズムを追跡し、多極的な中核地帯の存在を認めながらも、最も中心となる地域は歴史的に移動することを指摘して、ヨーロッパ中心の世界経済システムは中心移動のひとつの形態にすぎな

30) Chaudhury and Moriseau (1999) を参照。15世紀のインド洋世界が「世界経済」であったことについては Plat and Wallerstein (1999) を参照。

い、とするフランクの主張がある。ともに、近代においてヨーロッパ中心のシステムへの大きな転換を前提にしている点では同じなのであるが、その性格付けにおいて決定的な違いが生まれている。

中核／辺境の従属的關係をともなった分業体系によって特色づけられた近代世界システムは、中核地域の移動というダイナミックな過程を組み込みながら、膨張していくという点で、その構造的な原型の出現をウォーラステインは16世紀にもとめたのである。フランクにとって、ユーラシア大陸で展開された多極的な世界経済のシステム（「前近代」世界システム）は普遍的な構造を示しているのであり、16世紀以降に出現した環大西洋経済圏は多極的世界経済の新規参入であり、拡大でしかなかった。国際収支から見れば、ヨーロッパは依然として辺境であり、中心は18世紀前半までアジアにあったのである。そして、近代経済成長というパターンがヨーロッパ中核地域に定着し、資本輸出という構造的な国際的資金フローのパターンを定着させたのは19世紀後半からである。

近代をどの時点でとらえるかは、近代の性格をどのように捉えるかで異なってくることは冒頭でふれた通りである。また、近代を問うことは「近代以前」をどう捉えるかと裏腹でもある。2人の世界システム論者が、出発点において近代世界経済の特性について基本的に共有していたものの、最終的に袂を分けたのは「前近代」世界システムについて大きく見解を異にしてしまったからにはほかならない。本稿では、ウォーラステインの提示と反響を追って、世界システム理論がその魅力ゆえに近代以前の社会にも適用され、付随して生じた適用上の問題に世界システム論の修正が迫られたことにふれてきた。それは、結局フランクが最大の関心を払った、ユーラシア世界をどう捉えるかという問題に集約されることになった。前節で簡略的に追ってきたユーラシア世界システムの歴史的経過は、近代をどう捉えるかを裏側からみる材料になりうるはずである。

ユーラシア大陸の東部と西部にある中国とヨーロッパを比較することは重要である。中国はその国土（人口と資源）の豊かさゆえに内在的にしかも総合的に経済力を高めることができた。ヨーロッパは人口と資源の相対的な乏しさゆえに、辺境的な地位から脱出するには新大陸とアフリカを蓋う環大西洋経済圏が必要であった。中国は、他のアジア諸地域と同じようにある地理的な領域に

帝国の版図を限定して、経済の領域には深く干渉しないという、政治と経済の分離体制をとってきた。それは中国だけでなく、アジアの多極的世界経済の大きな特徴であり、それゆえ経済は政治を凌駕してほぼ分解可能だが分裂することのないシステムを自己組織化し続けてきたのである。

他方、新世界を植民地化してアフリカともに三角貿易によって築き上げた環大西洋経済圏は、ヨーロッパ本国でこそ帝国による広域支配はできなかったものの、海外で競争的あるいは協調的に軍事的征圧・威嚇という手段を使ってその支配と影響力を行使し、政治・軍事的領域と経済的領域が連繫することにより意図的に作り上げられたものであった。ヨーロッパ商人のアジアへの参入は軍事的威圧をともなったルール破りの強圧的なものであったのである。それでも、実際は新大陸の銀という購買力を持参した上での参入であったのであり、その取引のシェアは大きなものではなく、新大陸の銀生産が下火になるとともに、彼らの戦略は商業圏の支配から現地の植民地化へ向かわざるをえなかった。それがフランクのいう転換の時期、18世紀後半であり、世界経済の重心移動の時期であった。

ヨーロッパ中心の世界システムは、19世紀半ば中国を強制的に門戸開放させることにより完成をみる。1800年頃までは、中国とヨーロッパ諸国の経済水準は互角であったという(Pomeranz 2000)。その後辿った両地域の経路はあまりにもかけ離れたものであった。ウォーラーステインが描いた中核／辺境ヒエラルキーの強化と外部地域の辺境化という過程には、彼が想定した経済中心の分業体系の拡大化という側面だけでなく、そのルールと秩序を強制的に押し付ける政治・軍事的側面が両輪の如く存在していたことを見逃してはいけない。対して、アジアにおいて成立していた「前近代」世界システムは、その広大な大陸の上で（一時期を除いて）政治・軍事的征圧に服することなく、長期的には各主要地域に拠った国家・帝国の間を有機的に、断絶することなく、商業ネットワークを通じて形成されていた。それは、時代の進行とともに威信財、奢侈品から生活必需品へと取引の内容と範囲が拡大し、各種の市場を商人のネットワークを通じて取引が行われるという、高度の信用制度のともなった、貨幣経済の世界であった。

近代とは、ひとつの見方をすれば、政治が経済と協調してその膨張性を含んだ適者生存のルールを押し付け、一極化に収斂していく分業体系を進行させて

いく自己増殖的システムが、一見政治の専制が強烈である印象をあたえながらもその及ぶ領域は常に限定され、全体では分権的な政治体制に留まり、経済がその政治の領域を包含し連繫するという、自己組織的だが制御的なシステムを凌駕していく過程である、といえる。ウォーラーステインにとっては逆説的となるのだが、政治と経済の逆転した関係が成立した時代といえるのである。しかしながら、近代世界システムは「前近代」世界システムを葬り去ったわけではない。例えば、7世紀からその領域を拡大してきたイスラム世界という国家を超えた商業と宗教の文化圏は現在においても健在であり (Voll 1994)、それは「前近代」システムの性質を依然引き継いでいる。また、現代における電子空間上のネットワークの進行と深化、それに同調する非国家的組織の多様化と拡大は、膨張という性質を今のところ見せてはいるが、「前近代」システムとしての特徴を見せているといえなくもないのである。

(あかし・しげお 成城大学経済学部教授)

〈参考文献〉

- 明石茂生 (2002) 「国家の形成：空間的視点からの考察」『成城大学経済研究』156: 201-78.
- 明石茂生 (2003) 「帝国の盛衰—管理者・代理人モデル—」『成城大学経済研究』163: 309-46.
- 足立啓二 (1990) 「専制国家と財政・貨幣」中国史研究会編『中国専制国家と社会統合』文理閣: 119-46.
- 家島彦一 (1991) 『イスラム世界の成立と国際商業：国際商業ネットワークの変動を中心に』岩波書店.
- 石澤良昭・生田滋 (1998) 『東南アジアの伝統と発展』中央公論社.
- 今田高俊 (1986) 『自己組織性—社会理論の復活—』創文社.
- 上杉彰紀 (1997-98) 「初期歴史時代／鉄器時代における北インドの都市」『インド考古研究』19: 25-50.
- 梅棹忠夫 (1967) 『文明の生態史観』中央公論社.
- 大木昌 (1999) 「東南アジアと『交易の時代』」『世界歴史15：商人と市場—ネットワークの中の国家』岩波書店: 105-36.
- 大貫良夫・前川和也・渡辺和子・屋形禎亮 (1998) 『人類の起源と古代オリエント』中央公論社.
- 岡田英弘 (1992) 『世界史の誕生』ちくまライブラリー.
- 小川英雄・山本由美子 (1997) 『オリエント世界の発展』中央公論社.
- 坂井隆・西村正雄・新田栄治『東南アジアの考古学』同成社.
- 部勇造 (1999) 「インド諸港と東西貿易」『世界歴史6：南アジア世界・東南アジア世界の形成と展開、—15世紀』岩波書店: 133-56.
- 関雄二 (1997) 『アンデスの考古学』同成社.

- 高谷好一 (1997) 『多文明世界の構図：超近代の基本的論理を考える』 中公新書。
- 西嶋定生 (1981) 『中国古代の社会と経済』 東京大学出版会。
- 深沢克巳 (1999) 「ヨーロッパ商業空間とディアスポラ」 『世界歴史 15：商人と市場—ネットワークの中の国家』 岩波書店: 181-207。
- 藤川繁彦編 (1999) 『中央ユーラシアの考古学』 同成社。
- 松井透 (1999) 「商人と市場」 『世界歴史 15：商人と市場—ネットワークの中の国家』 岩波書店: 3-78。
- 松田壽男 (1992) 『アジアの歴史：東西交渉からみた前近代の世界像』 岩波書店。
- 山崎元一 (1997) 『古代インドの文明と社会』 中央公論社。
- 安田喜憲 (1994) 「紀元前 1000 年のクライシス」 梅原猛・伊東俊太郎監修 『古代文明と環境』 思文閣出版。
- 湯浅越男 (1985) 『文明の歴史人類学：「アナール」・ブローデル・ウォーラーステイン』 新評論。
- Abu-Lughod, J. (1989), *Before European Hegemony: The World System 1250-1350*, Oxford University Press. (佐藤次高・斯波義信・高山博・三浦徹訳 『ヨーロッパ覇権以前：もうひとつの世界システム (上・下)』 岩波書店, 2001)。
- Algaze, G. (1993), *The Uruk World System: The Dynamics of Expansion of Early Mesopotamian Civilization*, University of Chicago Press.
- Algaze, G. (2001), "The Prehistory of Imperialism: The Case of Uruk Period Mesopotamia," in M. S. Rothman, ed., *Uruk Mesopotamia and Its Neighbors, Cross-Cultural Interactions in the Era of State Formation*, School of American Research Press: 27-83.
- Amin, S. (1991), "The Ancient World-Systems versus the Modern Capitalist World-System," *Review* 14: 349-85.
- Aoki, M. (2001), *Towards a Comparative Institutional Analysis*, MIT Press. (瀧澤弘和・谷口和弘訳 『比較制度分析に向けて』 NTT 出版, 2001)。
- Barfield, T. (2001), "The Shadow Empires: Imperial State Formation along the Chinese-Nomad Frontier," in S. Alcock, T. D'Altroy, K. Morrison, and C. Sinopoli, eds., *Empires: Perspectives from Archaeology and History*, Cambridge University Press: 10-41.
- Blanton, R. and G. Feinman (1984), "The Mesoamerican World-System," *American Anthropologist* 86: 673-92.
- Braudel, F. (1976), *La Dynamique du capitalisme*, Lectures presented at Johns Hopkins University. (金塚貞文訳 『歴史入門』 太田出版, 1995)。
- Braudel, F. (1979), *Civilisation matérielle, économie et capitalisme, XV^e-XVIII^e siècle, tome 1. les structures du quotidien: le possible et l'impossible, tome 2. les jeux de l'échange, tome 3. le temps du monde*, Librairie Armand Colin. (物質文明・経済・資本主義 15—18 世紀, 村上光彦訳 『日常性の構造 1・2』 1985, 山本淳一訳 『交換のはたらき 1・2』 1986・1988, 村上光彦訳 『世界時間 1・2』 1995・1999, みすず書房)。
- Butzer, K. (1997), "Sociopolitical Discontinuity in the Near East c.2200 B.C.E.: Scenarios from Palestine and Egypt," in H. Dalfes, G. Kukla, and H. Weiss, eds., *Third Millennium BC Climate Change and Old World Collapse*, Springer: 245-96.
- Chase-Dunn C. and T. Hall (1991), *Core/Periphery Relations in Precapitalist Worlds*, Westview.

- Chase-Dunn C. and T. Hall (1993), "Comparing World-Systems: Concepts and Working Hypotheses," *Social Forces* 71: 851-86.
- Chase-Dunn C. and T. Hall (1997), *Rise and Demise: Comparing World-Systems*, Westview.
- Chaudhury S. and M. Morineau (1999), "Introduction," in S. Chaudhury and M. Morineau eds., *Merchants, Companies and Trade: Europe and Asia in the Early Modern Era*, Cambridge University Press: 1-18.
- Chew, S. (1999), "Ecological Relations and the Decline of Civilizations in the Bronze Age World-System: Mesopotamia and Harappa 2500 B.C.-1700 B.C.," in W. Goldfrank, D. Goodman, and A. Szasz, eds., *Ecology and the World-System*, Greenwood Press: 87-106.
- Curtin, P. (1984), *Cross-Cultural Trade in World History*, Cambridge University Press, (田村愛理・中堂幸政・山影進訳『異文化間交易の世界史』NTT出版, 2002).
- Diamond, J. (1997), *Guns, Germs, and Steel: The Fates of Human Societies*, Norton, (倉骨彰訳『銃・病原菌・鉄 上・下』草思社, 2000).
- Drews, R. (1993), *The End of Bronze Age: Change in Warfare and the Catastrophe ca.1200 B.C.*, Princeton University Press.
- Edens, C. (1992), "Dynamics of Trade in the Ancient Mesopotamian 'World System'", *American Anthropologist* 94: 118-39.
- Ekholm, K. and J. Friedman (1982), "Capital Imperialism and Exploitation in the Ancient World-Systems," *Review* 6: 87-110.
- Ekholm, K. and J. Friedman (1985), "Towards a Global Anthropology," *Critique of Anthropology* 5: 97-119.
- Feinman, G. (1998), "Scale and Social Organization Perspectives on the Archaic State," in G. Feinman and J. Marcus, eds., *Archaic States*, School of American Research Press: 95-134.
- Frank, A. G. (1995), "The Modern World-System Revisited: Rereading Braudel and Wallerstein," in S. K. Sanderson, ed., *Civilizations and World-Systems*, Altamira Press: 163-94.
- Frank, A. G. (1998), *ReOrient: Global Economy in the Asian Age*, University of California Press, (川下範久訳『リオリエント：アジア時代のグローバル・エコノミー』藤原書店, 2000).
- Frank, A. G. (2000), "Immanuel and Me With-Out Hyphen," *Journal of World-Systems Research* 6: 216-31, <http://jwsr.ucr.edu>.
- Frank, A. G. and B. Gills (1992), "The Five Thousand Year World System: An Interdisciplinary Introduction," *Humbolt Journal of Social Relations* 18: 1-79.
- Frank, A. G. and B. Gills (1993), *The World System: :Five Hundred Years or Five Thousand?*, Routledge.
- Frank, A. G. and B. Gills (2000), "The Five Thousand Year World System in Theory and Praxis," in R. Denemark, J. Friedman, B. Gills and G. Modelski, eds., *World System History: The Social Science of Long-Term Change*, Routledge: 3-23.
- Frankenstein, S. and M. Rowlands (1978), "The Internal Structure and Regional Context of Early Iron Age Society in South-Western Germany," *Bulletin of the Institute of Archaeology of London* 15: 73-112.
- Friedman, J. (2000), "Concretizing the Continuity Argument in Global Systems Analysis," in R. Denemark, J. Friedman, B. Gills and G. Modelski, eds., *World System History: The Social Science of Long-Term Change*, Routledge: 133-52.

- Fujita, M., P. K. Krugman and A. J. Venables (2000). *The Spatial Economy: Cities, Regions, and International Trade*, MIT Press. (小出博之訳『空間経済学』東洋経済新報社, 2000).
- Greene, K. (1986). *The Archaeology of the Roman Economy*. Batsford. (本村凌二監修, 池口守・井上秀太郎訳『ローマ経済の考古学』平凡社, 1999).
- Greene, K. (2000). "Technological Innovation and Economic Progress in the Ancient World: M. I. Finley Re-considered," *Economic History Review* 53:29-59.
- Hall, T. (1991). "The Role of Nomads in Core/Periphery Relations." in C. Chase-Dunn and T. Hall, eds., *Core/Periphery Relations in Precapitalist Worlds*. Westview: 212-39.
- Hall, T. and C. Chase-Dunn (1996). "Comparing World-Systems: Concepts and Hypotheses." in P. Peregrine and G. Feinman, eds., *Pre-Columbian World Systems*. Prehistory Press: 11-25.
- Harris, W. V. (1979). *War and Imperialism in Republican Rome 327-70 BC*. Oxford University Press.
- Helpman, E. (1984). "Increasing Returns, Imperfect Markets, and Trade Theory." in R. Jones and P. Kenen eds., *Handbook of International Economics*, vol. I, North-Holland: 325-65.
- Hopkins, K. (1980). "Taxes and Trade in the Roman Empire (200BC-AD400)," *Journal of Roman Studies* 70: 101-25.
- Klengel, H. (1983). *Handel und Haendler im Alten Orient*. Koehler und Amelang. (江上波夫・五味亭訳『古代オリエント商人の世界』山川出版社, 1983).
- Kneer, G. and A. Nassehi (1993). *Niklas Luhmanns Theorie Sozialer Systeme*, Wilhelm Fink Verlag. (館野受男・池田貞夫・野崎和義訳『ルーマン社会システム理論』新泉社, 1995).
- Kohl, P. (1987a). "The Use and Abuse of World-Systems Theory: The Case of the Pristine West Asian State," in M. Schiffer ed., *Advances in Archaeological Method and Theory*, 11. Academic Press: 1-36.
- Kohl, P. (1987b). "The Ancient Economy, Transferable Technologies and the Bronze Age World-System: A View from the Northeastern Frontier of the Ancient Near East." in M. Rowlands, M. Larsen, and K. Kristiansen, eds., *Centre and Periphery in the Ancient World*, Cambridge University Press: 13-24.
- Kradin, N. (2002). "Nomadism, Evolution and World-Systems: Pastoral Societies in Theories of Historical Development," *Journal of World-Systems Research* 8: 368-88. <http://jwsr.ucr.edu>.
- Kristiansen, K. (1987). "Centre and Periphery in Bronze Age Scandinavia." in M. Rowlands, M. Larsen, and K. Kristiansen, eds., *Centre and Periphery in the Ancient World*, Cambridge University Press: 74-86.
- Krugman, P. R. (1995). "Increasing Returns, Imperfect Competition and the Positive Theory of International Trade," in G. Grossman and K. Rogoff, eds., *Handbook of International Economics*, vol. III, North-Holland: 1243-77.
- Krugman, P. R. (1996). *The Self-Organization Economy*. Blackwell. (北村行伸・妹尾美起訳『自己組織化の経済学』東洋経済新報社, 1997).
- Kuhrt, A. (2001). "The Achaemenid Persian Empire (c.550-c.330 BCE): Continuities, Adaptations, Transformations," in S. Alcock, T. D'Altroy, K. Morrison, and C. Sinopoli, eds., *Empires: Perspectives from Archaeology and History*. Cambridge University Press: 93-123.
- La Lone, D. (2000). "Rise, Fall, and Semiperipheral Development in the Andean World-System," *Journal of World-Systems Research* 6: 68-99. <http://jwsr.ucr.edu>.
- Larsen, M. T. (1987). "Commercial Networks in the Ancient Near East," in M. Rowlands, M. Larsen,

- and K. Kristiansen, eds., *Centre and Periphery in the Ancient World*, Cambridge University Press: 47-56.
- Liverani, M. (1987), "The Collapse of the Near Eastern Regional System at the End of the Bronze Age: The Case of Syria," in M. Rowlands, M. Larsen, and K. Kristiansen, eds., *Centre and Periphery in the Ancient World*, Cambridge University Press: 66-73.
- Matthews, R. (2003), *The Archaeology of Mesopotamia. Theories and Approaches*, Routledge.
- Morkot, R. (2001), "Egypt and Nubia," in S. Alcock, T. D'Altroy, K. Morrison, and C. Sinopoli, eds., *Empires: Perspectives from Archaeology and History*, Cambridge University Press: 227-51.
- Mughal, M. (1990), "The Decline of the Indus Civilization and the Late Harappa Period in the Indus Valley," *Lahore Museum Bulletin* 3: 1-26.
- Peregrine, P. (1992), *Mississippian Evolution: A World-System Perspective*, Prehistory Press.
- Peregrine, P. (1996), "Introduction: World-Systems Theory and Archaeology," in P. Peregrine and G. Feinman, eds., *Pre-Columbian World Systems*, Prehistory Press: 1-10.
- Plat, R. A. and I. Wallerstein (1999), "Of What World-System Was Pre-1500 'India' a Part?," in S. Chaudhury and M. Morineau eds., *Merchants, Companies and Trade: Europe and Asia in the Early Modern Era*, Cambridge University Press: 25-41.
- Polanyi, K. (1977), *The Livelihood of Man*, H. W. Pearson, ed., Academic Press. (玉野井芳郎・栗本慎一郎訳『人間の経済Ⅰ・Ⅱ』岩波書店, 1980).
- Pomeranz, K. (2000), *The Great Divergence: Europe, China, and the Making of the Modern World Economy*, Princeton University Press.
- Possehl, G. L. (1998), "Sociocultural Complexity Without the State: The Indus Civilization," in G. Feinman and J. Marcus, eds., *Archaic States*, School of American Research Press: 261-91.
- Rostovtzeff, M. (1941), *The Social and Economic History of the Hellenistic World*, Clarendon Press.
- Rothman, M. S. (2001), "The Local and the Regional: An Introduction," in M. S. Rothman, ed., *Uruk Mesopotamia and Its Neighbors, Cross-Cultural Interactions in the Era of State Formation*, School of American Research Press: 3-26.
- Schneider, J. (1977), "Was There a Pre-Capitalist World-System?," *Peasant Studies* 6: 20-29, reprinted in C. Chase-Dunn and T. D. Hall, eds. (1991), *Core/Periphery Relations in Precapitalist Worlds*, Westview.
- Sherratt, A. (1993), "What would a Bronze-Age World System Look Like?: Relations Between Temperate Europe and the Mediterranean in Late Prehistory," *Journal of European Archaeology* 1: 1-57.
- Sherratt, A. (2000), "Envisioning Global Change: A Long-Term Perspective," in R. Denemark, J. Friedman, B. Gills and G. Modelski, eds., *World System History: The Social Science of Long-Term Change*, Routledge: 115-32.
- Shiple, G. (1993), "Distance, Development, Decline?: World-Systems Analysis and 'Hellenistic' World," in P. Bilde, T. Engberg-Pedersen, L. Hannestad, J. Zahle, and K. Randsborg, eds., *Centre and Periphery in the Hellenistic World*, Aarhus University Press: 270-84.
- Silver, M. (1995), *Economic Structures of Antiquity*, Greenwood Press.
- Simon, H. A. (1969), *The Science of Artificial*, MIT Press. (倉井武夫・稲葉元吉・矢野晴一郎訳『システムの科学』ダイヤモンド社, 1969).
- Snell, D. C. (1997), *Life in the Ancient Near East 3100-332 B.C.E.*, Yale University Press.

- Stein, G. (1999), *Rethinking World-Systems: Diasporas, Colonies, and Interaction in Uruk Mesopotamia*, University of Arizona Press.
- Tandy, D. (1997), *Worriors into Traders: The Power of the Market in Early Greece*, University of California Press.
- Thomas, C. G. and C. Conant (1999), *Citadel to City-State: The Transformation of Greece, 1200-700 B.C.E.*, Indiana University Press.
- Voll, J. (1994), "Islam as a Special World-System," *Journal of World History* 5: 213-26.
- Wallerstein, I. (1974), *The Modern World-System I: Capitalist Agriculture and the Origin of the European World-Economy in the Sixteenth Century*, Academic Press, (川北稔訳『近代世界システムⅠ・Ⅱ』岩波書店, 1981).
- Wallerstein, I. (1979), *The Capitalist World-Economy*, Cambridge University Press, (藤瀬浩司・麻沼賢彦・金井雄一訳『中核と周辺の不平等』, 日南田静真監訳『階級・エスニシティ・国際政治』名古屋大学出版会, 1987).
- Wallerstein, I. (1980), *The Modern World-System II: Mercantilism and the Consolidation of the European World-Economy, 1600-1750*, Academic Press, (川北稔訳『近代世界システム, 重商主義と「ヨーロッパ世界経済」の凝集』名古屋大学出版会, 1993).
- Wallerstein, I. (1989), *The Modern World-System III: The Second Era of Great Expansion of the Capitalist World-Economy, 1730-1840s*, Academic Press, (川北稔訳『近代世界システム, 大西洋革命の時代』名古屋大学出版会, 1997).
- Wallerstein, I. (1993), "World System vs. World-Systems," in A. G. Frank and B. Gills, eds., *The World System: Five Hundred Years or Five Thousand?*, Routledge: 291-96.
- Wallerstein, I. (1995), "Hold the Tiller Firm: On Method and the Unit of Analysis," in S. K. Sanderson, ed., *Civilizations and World-Systems*, Altamira Press: 239-47.
- Warburton, D. (2000), "State and Economy in Ancient Egypt," in R. Denemark, J. Friedman, B. Gills and G. Modelski, eds., *World System History: The Social Science of Long-Term Change*, Routledge: 169-84.
- Wolf, E. R. (1982), *Europe and the People Without History*, University of California Press.
- Woolf, G. (1990), "World-Systems Analysis and the Roman Empire," *Journal of Roman Archaeology* 3: 44-58.

「前近代」世界システム：形成と変容 (研究報告 No. 38)

平成 16 年 3 月 20 日 印 刷

平成 16 年 3 月 25 日 発 行

非売品

著 者 明 石 茂 生

発行所 成城大学経済研究所

〒157-8511 東京都世田谷区成城 6-1-20

電 話 03 (3482) 1181 番

印刷所 白陽舎印刷工業株式会社
